

初學

遂軒閔德編纂  
記傳論說作例大全

卷中

733  
144

雜語

照亮類

惟台鑿セ

ヨ○統テ

照鑿ヲ祈

ル○萬惟

丙照セヨ

○番鑿馬

○鑿亮セ

ヨ○鑑亮

セヨ○鑿

照セヨ○

亮察セヨ

紀事類語

聖天子上ニ在リ賢

宰相之ヲ輔翼ス○

明主上ニ在リ賢良

之ヲ輔翼ス○皇統

連綿天壤ト窮リナ

シ○天孫維統一統

萬世○我國跡ノ萬

國ニ卓越スル○世

界無比ノ國跡ナリ

○制度文物次第ニ

備ハル○百度更張

シ○大統煥發ス○

初學  
捷徑記傳論說作例大全卷中

遂軒 関 徳士順 編纂

紀事

此部門ニハ善行佳話ノ世道人心ヲ益ス  
ルニ足ルベキ紀事文ヲ蒐録ス其本邦人  
ノ手ニ成リ務メテ單簡ナルノ文ヲ主ト  
スルハ乃チ記遊部門ノ例ノ如シ

○紀後光明天皇事 那珂通高

後光明天皇英明剛毅程朱ノ學ヲ好ミ善ク文ヲ  
屬シ玉フ藤原惺窩ガ宋學ヲ主唱スルノ功ヲ嘉

○諒鑒セ	○冰鑒	○心	○照セヨ	○昭諒セヨ	○昭亮セ	○惟高	○崇照	○惟	○惟	○希クハ鑒	○存セヨ	○伏惟フ尊
------	-----	----	------	-------	------	-----	-----	----	----	-------	------	-------

シ御序ヲ製シテ其文集ニ冠ス帝天資雷ヲ畏ル  
 因テ謂ラク克己ノ道此ニ在リト迅雷ノ日坐ヲ  
 簷外ニ設ケテ靜坐ス是ヨリ復々雷ヲ忌マズ曾  
 テ後水尾上皇ニ朝覲セント欲シ所司代板倉重  
 宗ニ命ズ重宗奏シテ曰朝覲ハ大禮ナリ幕府ニ  
 聞セザレバ不可ナリト帝曰ク然ラバ則チ長廊  
 ヲ造リ復道往來セバ何ゾ不可ナランヤト遂ニ  
 之ヲ造ラシメテ朝覲シ玉フ

○紀台徳公事 大槻磐溪

公平素未ダ嘗テ日影ヲ履マズ夕陽座ニ入レバ  
 必ズ避テ之ヲ過グ旁ラ挿花枝ヲ好ニ茶儀アル

鑒セヨ	○統テ冀ク	ハ番慈セ	○惟鑒	○統テ惟	原亮セヨ	○庶クハ	公之ヲ憐	○察セヨ	仰テ台亮	ヲ祈ル萬	荷セヨ
-----	-------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	-----

ヲ斟酌ス○制度宜  
 シキヲ得○法制ノ  
 更張時ニ適フ○群  
 賢一躰○立憲政躰  
 ヲ以テ標準トナス  
 ○國憲ヲ定メ民會  
 ヲ興ス○天下ノ治  
 ヲ論ズル者皆立憲  
 ヲ主張ス○制度之  
 ヲ賢ニ任ジ賦税之  
 ヲ民ニ委ス○萬國  
 無比ノ皇威ヲ以テ  
 公共無私ノ政ヲ行

毎ニ自カラ之ヲ床ニ安ンズ或冬日牡丹ヲ献ズ  
 ルアリ公一覽シ善ト稱ス左右啓シテ曰盍ゾ之  
 ヲ瓶ニ挿マザル公曰ク此花美ナリト雖氏節序  
 ノ正シキニアラズ賞翫スルヲ欲セザル所ナリ  
 ト枕ニ伏スル數旬未ダ嘗テ一朝モ梳頭ヲ廢セ  
 ズシテ曰ク然ク病メリト雖氏天下ノ政敬聽セ  
 ザル可ラズ豈蓬頭亂髮ヲ以テ之ニ接スベケン  
 ヤト嘗テ左右ニ語テ曰ク人恒ニ言アリ云ク浮  
 生ハ夢ノ如シ寸步外ハ皆闇夜矣須ク時ニ及ビ  
 娛樂スベキノ三ト此言大ニ謬ル當サニ云フベ  
 シ浮生既ニ短矣敬ヲ加ヘザル可ラズ敬ノ時亦

千里之ヲ 亮セヨ ○ 幸ニ照納 ヲ賜ヘ ○ 千祈萬祈 不盡類 草々不次 ○ 勿々不 盡 ○ 倉卒 附布 ○ 草 次布白 ○ 不次不莊 ○ 勿々懷

フ ○ 規律允トニ中 ヲ執リ更張叙ヲ失 ハズ ○ 門閥ヲ廢シ 以テ賢才ヲ擧ゲ ○ 衆賢心ヲ焦シ慮ヲ 苦シム ○ 細大區處 各條理アリ ○ 人各 能アリ不能アリ ○ 之ヲ撫スルニ恩信 ヲ以テス ○ 法簡ニ シテ政簡 ○ 政清ク 吏肅ム ○ 刑政清明 ○ 法ヲ持スル寛平

長ラズ豈勉強スル能ハザランヤト

○ 紀藝侯戒諸子事 全

元龜二年六月藝侯元就病ニ將サニ死セントス 諸子ヲ前ニ致シ箭數條ヲ呼取ル一ニ其子ノ數 ノ如シ乃チ手ニ自ラ糾シテ一束ト爲シカヲ極 メテ之ヲ折レ氏斷ツ一能ハザルナリ單ニ其一 條ヲ抽キ隨テ折レバ隨テ斷ツ因テ戒メテ曰ク 兄弟猶此箭ノゴトキナリ和スレバ則チ相依テ 事ヲ濟ス和セザレバ則チ各人各敗ル各等心ニ 銘シテ忘ル勿レト次子隆景進デ曰ク夫レ兄弟 ノ争ハ必ラズ欲ニ起ル欲ヲ棄テ義ヲ思ヘバ何

ヲ布ク ○ 不乙 ○ 不 贅 ○ 不備 ○ 不具 ○ 不 悉 ○ 不 宣 ○ 不罄 ○ 不既 ○ 縷情悉シ 難シ ○ 餘 卒々寫 ス能ハズ ○ 短筆總 々ヲ悉ス

○ 民ヲ愛スル赤子 ノ如シ ○ 百姓之ヲ 視ル父母ノ如シ ○ 詔ヲ下シ直言ヲ求 ム ○ 大ニ言路ヲ開 ク ○ 廣ク直言ヲ求 ム ○ 才ニ隨ヒ任ヲ 授ク ○ 直言極諫 ○ 信賞必罰 ○ 民其弊 ヲ受ク ○ 政事弛廢 ス ○ 批政尤モ多シ ○ 風俗一變ス ○ 承 平久シク武備弛ム

ノ不和カ之有ン元就悦ビ以テ然ト爲シ餘子ヲ 顧テ曰ク宜ク仲兄ノ言ニ從フ可シ

○ 紀吉宗公事 塩谷世弘

大將軍吉宗天資英明ニシテ意ヲ治平ニ銳クシ 老中水野忠之等ニ命シテ大計ヲ總會セシメ責 ムルニ富强ヲ以テス忠之法ヲ執ル嚴峻人ノ毀 譽ヲ顧ミズ善ク用テ節シ費ヲ省ク諸曹言フ所 一切報セズ之ヲ請フ再四已ムヲ得ザルモノハ 之ヲ可トス大城ノ内郭環ラスニ堞壁ヲ以テス 歲時修完費尤モ鉅ナリ忠之建議シテ墻ヲ撤シ 樹ルニ松ヲ以テシ以テ節障トナス識者謂フ天

新傳 文保 卷之中

能ハズ○	○吏民化ニ嚮フ○	老成ヲ召用ス○	亂	ヲ撥シ正ニ及ル○	天意人心ノ嚮フ所	○法制愈美ニシテ	百度愈張ル○	仰テ	天造ノ憲法ニ由リ	俯シテ人情事態ヲ	察ス○公論傳議天	下ノ公欲ヲ明ニシ	テ英雄ノ覬覦ヲ絶	ツ○良法美政綱舉	リ目張ル○人ヲシ
話頗ル長	○草呈○	言セズ○	具列セズ	○準高明之	不備○語	多ク及ボ	サズ○多	ズ○惶恐	ル所ニ非	能ク載ス	ク毛穎ノ	能ハズ○	能ハズ○	能ハズ○	能ハズ○

下道アレバ守リ四藩ニ在リ水野ノ見是ニ於テ  
 カ草ナリト將軍水川祠ハ潛邸ハ初將軍紀伊ヨリ  
 ノ土神ニ係ルヲ以テ將ニ其祭儀ヲ陞セ以テ山  
 王神田二祠ニ比セントス老中ニ下シテ議セシ  
 ム忠之謂ク若シ然ラバ他日親藩又大職ヲ續ク  
 者アラバ皆將ニ其土神ヲ崇祠セントスト將軍  
 擇ビズシテ罷ム

◎紀加藤清正事 尾藤二州

加藤清正曾テ保呂騎二十人ヲ選ブ部下ヲシテ  
 其用フベキモノヲ擧ゲシム坂川ナル者アリ而  
 シテ自ラ薦ム清正及ビ老臣皆輕テ之ヲ問フ坂

テ裁セヨ	○餘ハ面	既ヲ圖ル	○他ハ面	啓ス○面	ヲ埃ツ○	他ハ面暗	セシ○面	叙セン○	餘ハ暗聲	セシ○面	布會晤遠	ニ非ズ餘
テ感動セシムルニ	足ル者アリ○官留	事ナシ○權放棄	一切情ヲ同フス○	私事ヲ以テ公義ヲ	害セズ○治平天下	第一タリ○劇ニ居	テ間ナルガ如シ○	事ニ先後アリ務ニ	緩急アリ○國家ヲ	先ニシ和讐ヲ後ニ	ス○事ヲ言フ依違	スル所ナシ○躬ニ

川曰ク臣ガ父ハ君ガ為メニ鏡ヲ執リ堅ヲ摧ク  
 善ク戰ハザルモノニアラズ而ルニ臣其果シテ  
 保侶ニ堪ルヤ否ヤヲ識ル能ハズ人ヲ知ルノ難  
 キ父子猶然リ況ンヤ敢テ他人ヲ薦ムルヲヤ我  
 身ノ如キハ則チ之ヲ知ル熟信ノ厚キ此臣ノ自  
 ラ薦ム所以ナリト其言從容ニシテ其色自若タ  
 リ清正歎稱シ之ヲ用ユ

◎紀板倉重宗事 長野豊山

防州板倉公京ニ尹タリ一日出テ行ク嬰兒ト雖  
 氏皆避ケ匿ル屏息シテ其過グルヲ埃ツ一兒ア  
 リ十歳可リ獨リ避ケズ且從テ而シテ之ヲ罵ル

紀事門 四

佈ヲ期ス  
 ○切祝マ  
 節檢ヲ行フ○姦吏  
 手ヲ斂ム○民皆畏  
 レテ之ヲ愛ス○志  
 ヲ秉リ信行シ豪勢  
 ヲ避ケズ○請託ヲ  
 受ケズ○法度ヲ守  
 リ僥倖ヲ抑ヘ親黨  
 ニ私セズ○罪ヲ得  
 ル者怨言ナシ○頑  
 民面ヲ華ム○速人  
 風ヲ望ム○内外他  
 事○内外又安○庶  
 績緒ニ就ク○一視  
 線○林鳥

公之ヲ聞キ命ジテ其父ノ姓名里居ヲ問ヒ還テ  
 府吏ニ謂テ曰ク其民嘗テ訴フルカ吏之ヲ檢ス  
 嘗テ訟ヘテ而シテ克々ザル者ナリ是ニ於テ再  
 ビ召シテ之ヲ按ズルニ果シテ寃ナリ乃チ金ヲ  
 賜テ之ヲ謝ス嗚呼公判私ナキハ官吏ノ難ンズ  
 ル所過ヲ知テ能ク改ムルハ聖人ノ貴ブ所今防  
 州一舉シテ而シテ兩美具ハル豈賢ナラズヤ  
 ○紀豊太閤事 廣瀬旭莊  
 豊臣公名護屋ニ陣シ以テ朝鮮ヲ伐ツノ師ヲ濟  
 ス一日樓ニ在リ帽其面ヲ掩フ者アリ騎シテ前  
 ヲ過グ公勃然トシテ曰ク奴何スル者ゾ帽ヲ脱

反哺○同  
 氣運枝○  
 棠棣○鶴  
 鷓○被ヲ  
 共ニシ○  
 声ヲ識ル  
 ○難兄難  
 弟○芝蘭  
 并秀ツ○  
 龍駒鳳雛  
 ○卿々○  
 細君○相  
 敬スル賓

同仁○萬邦化ニ嚮  
 フ○教養其人ヲ得  
 ル○鼓舞ノ道得テ  
 壅滯ノ端混グ○奔  
 競ノ心ヲ抑ヘテ僥  
 倖ノ門ヲ杜グ○無  
 用ノ弊ヲ止メ不怠  
 ノ務ヲ廢ス○猜害  
 排擯反覆相因ル○  
 上下齟齬シテ万民  
 信服ス○朝令暮改  
 ○朝出暮廢○題言  
 ハ直ヲ賣ルニ近シ

紀大窪相州事 齋藤拙堂  
 後ナル者遠ニ呼デ曰ク名ヲ問フベシト騎士  
 之ヲ聞テ回ル懐ヲ探リ蠟書ヲ出シテ曰ク之ヲ  
 上レ公ノ名モ亦在リト遂ニ去ル吏歸テ之ヲ獻  
 ス公視テ而シテ之ヲ次ス其故ヲ知ル者ナシ

ノ如シ○  
 錦封○鏡  
 約○生死  
 穴ヲ同フ  
 ス○案ヲ  
 舉テ眉ヲ  
 奇フス○  
 前奴○布  
 被○義方  
 ○庭訓○  
 櫻口柳腰  
 ○紅拂○  
 緑珠○隣

○諷言ハ刺譏ニ隣  
 シ○激切ハ毀謗ニ  
 近シ○援引ハ迂疎  
 ニ疑カハル○切ヲ  
 貧リ名ヲ慕フ○天  
 下ノ事ハ豫メ標準  
 高遠二期セザル  
 可ラズ○歩々序ヲ  
 逐ヒ著々實ヲ認ム  
 ○百事湊合シ萬緒  
 蟻集ス○苟クモ一  
 藝ヲ校シ一畝ニ誇  
 ル者○工作未タ盛

慶長ノ未大窪相州京師ニ如テ耶蘇ノ妖賊ヲ治  
 ム本多佐州之ヲ譏ス言フ不軌ヲ圖ルト東照公  
 命ジテ相州ヲ彦根ニ安置ス所司代某教ヲ奉シ  
 テ相州ノ館ニ造ル相州方ニ容ト碁ヲ囲ム之ヲ  
 聞テ神色變セズ徐ニ出テ命ヲ受ク從者意平ナ  
 ラズ之ヲ殺サント請フ固ク禁ジテ許サズ都人  
 相驚テ曰ク大窪氏兵ヲ殺シ命ヲ拒グト都々洵  
 ガニ二條城ノ諸門啓カズ相州之ヲ聞キ索ヲ命ジ  
 テ甲仗ヲ束テ所司代ニ付ス訛言乃チ止ム相州  
 彦根ニ至ル城主井伊公其罪ナキヲ憫シ入テ之  
 ナ吊シ從容之ニ謂テ曰ク盡ゾ狀ヲ上リ冤ヲ訟  
 ヘザル相州曰ク果シテ然ラバ冤必ズ雪ガン然

ヲ擇ム○  
 氷上人○  
 月下老○  
 納采親迎  
 ○氷清玉  
 潤○尺布  
 斗粟○班  
 衣ノ裁○  
 泉ヲ汲テ  
 魚ヲ得タ  
 リ○冬筍  
 林ニ生ズ  
 ○橘ヲ懷

ナラズ産業未タ興  
 ラズ○殖産是務ノ  
 富有是圖ル○民政  
 ナ敦フシ休養ヲ重  
 ンズ○民ヲ富マシ  
 本ヲ固フス○施政  
 ノ緩急ヲ計リ措置  
 ノ前後ヲ度ル○士  
 民ヲシテ皆優遊以  
 テ其廉耻ノ心ヲ養  
 フヲ得セシム○雷  
 霆ノ威雨露ノ恩民  
 得テ之ヲ窺フ無シ

レ氏反覆自ラ辨ズレバ君ノ過ヲ顯ハザルチ  
 得ズ吾志ニ非ルナリ候感嘆シテ出ツ相州出居  
 無聊忠臣記ヲ著シ自ラ其志ヲ述ブト云フ君子  
 曰ク大窪子は是ニ於テカ忠ナリ己レ寧口宛チ蒙  
 ルモ而モ君ノ過ヲ顯ハスチ欲セズ不忠ニシテ  
 能ク是ノ如クナランヤ明君上ニ在リ一タビ自  
 ラ其誣ヲ辨セバ則チ察セザル莫シ忠臣熱ケラ  
 レ護者志ヲ得亦明德ノ累ヒ為ラズト謂フチ得  
 ンヤ是ヲ以テ潮州哀痛ノ疏瓊崖涕泣ノ請ヒ君  
 子之ヲ取ル

○紀蒲生氏卿事 津阪東陽  
 豊關白ノ薩ヲ伐ツヤ侍臣試ニ諸侯ヲ品シ其

ニス○堪

ナ分ツ○

師文類

章句ノ師

束脩以

上ヲ行フ

○舌耕ヲ

事トス○

誓古ノカ

○心ハ萬

古ヲ貫ク

○函丈○

淵源遠シ

○其名ヲ取テ其實

ヲ問ハズ○陽ニ公

論ヲ唱ヘ陰ニ私利

ヲ要ス○財用増殖

スレバ天下自カラ

至大ノ利アリ○根

本ノ計ニ疎ニシテ

往々苛細ノ譏ヲ受

ク○山澤ノ政ヲ修

ム○智識開ケズ志

操縦カラズ○之ヲ

法制ニ拘束シ之ヲ

賦責ニ督責ス○時

志業ヲ量ル者アリ関白其説ヲ聞キ笑テ曰ク是

小兒ノ瓜ヲ買フニ徒ニ大者ヲ擇ブノミ獨蒲生

氏卿吾カ為ス所ヲ為スニ足ル小諸侯ト雖氏甚

ダ畏ル可キナリ翌朝高キニ憑テ行軍ヲ觀ル氏

郷ノ軍容極メテ儼号ヲ鳴ラシ軍ヲ駐ム立ドコ

ロニ便チ止ツテ馬ヲ齊フス右脚ノ阪ニ進ム者

左脚舉ルニ及バズシテ而シテ止ル関白指シ示

シテ曰ク他ノ馬足ヲ者ヨ侍臣感服ス其巖城ヲ

攻メ破ル豪武猛烈番ニ雷震ノ震フガ如クナル

ノミナラザルナリ後三年東征ニ從フ切ヲ以テ

封メ會津ニ移シ俄カニ大諸侯ト為ル是日中秋

関白節ヲ白河ニ駐メ諸侯ノ為メニ玩月宴ヲ設

○指南

太山北斗

○心カ苦

シム○乾

坤一大儒

身ハ道

ノ為メニ

重シ志

ハ貧ヲ以

テ降ラズ

○名ハ高

シ一代ノ

儒○胸中

ニ古今アリ事隨テ

變ス○豈今日ノ開

明ヲ以テ往時ノ朴

陋ヲ笑フヲ得ンヤ

○久シク專權ノ餘

習ニ慣ル未ダ權

利義務ノ何物タル

ヲ知ラズ○富強ノ

術ヲ講ジテ以テ雄

ヲ四海ニ張ラント

ス○學校ヲ崇飾シ

道路ヲ修夷ス○稟

實ヲ未花ニ求メ時

ク山崎定勝暮ニ先チ獨至ル氏郷己ニ在リ柱ニ

倚テ淚ヲ垂ル定勝氏郷ト親シ徑メニ膝前ニ造

リ榮遷ヲ稱賀シ其恩遇ニ感泣スルヲ贊ス氏郷

乃チ頭ヲ舉テ曰ク山崎子カ氏郷棄ラレタリ定

勝驚テ曰ク惡は何ノ言ゾヤ氏郷曰ク吾中原ニ

在レハ天下ニ霸クラン今ハ則チ避辭ニ介ケラ

ル其復々何メ為サンヤ是ヲ以テ慨嘆シテ泣ク

ノミ嗟呼誠ニ畏ル可キカナ関白ノ眼力其肺肝

ヲ見ルヤ真ニ英雄ヲ識ル但其膽略技藝英雄人

ニ忌ムナ省セズ朝鮮ノ役從テ筑紫營ニ在リ關

白其過ニ切ヲ拔ヘサルヲ念ル氏郷奮フテ曰ク

敢テ願クハ臣ニ三韓ヲ賜ヘバ直チニ捲テ之ヲ



經濟ノ策 夜ヲ雞卵ニ望ム  
アリ 説 群小覬覦ノ迹ヲ杜  
ク所ハ紙 ヅ○天下未ダ百全  
上ノ語ノ ノ利アラサルナリ  
ミ 堂ニ 良法ノ天下ニ在  
外リ未ダ ル固ヨリ小弊ナキ  
室ニ入ラ 能ハズ○至盛未ダ  
ス 筮ヲ 以テ安ニス可ラズ  
擔ヒ笈ヲ 盛ナリト雖モ七ブ  
負ヒ 二 可キ者アリ 至衰  
人心ヲ同 未ダ以テ棄ツ可ラ  
フス其利 不衰ルト虫尾興ル  
金ヲ斷ツ 可キ者アリ 窮民

取ラン是ニ於テ大ニ忌惡セラレ遂ニ毒ニ中テ  
卒ス年僅ニ四十  
○紀華盛頓事 中村敬字  
華盛頓少時一營兵ニ將トシ亞力山大ニ次ス偶  
沛業ト事ヲ論シテ合ハズ語之ヲ犯ス沛怒テ杖  
ヲ以テ華ヲ撃チ地ニ倒ス營兵之ヲ聞キ噪キ至  
リ報復ヲ圖ラント欲ス華切ニ軍衆ニ請ヒ怒ヲ  
息メ營ニ回ル華以為ラク曲我ニ在リ謝セザル  
可ラズト次日人ヲ遣テ沛ニ言テ曰ク酒舍ニ於  
テ相見ント欲スト沛意フニ是必ズ我ヲ擲メ與  
ニ戰フナラント至レバ則チ案上酒樽ヲ陳ネテ  
兵器ヲ見ズ華坐チ起チ從容トシテ言テ曰ク人

同心ノ 存活ノ道ヲ失フ  
言其良蘭 自ラ貶シテ民ヲ救  
ノ如シ フ 大ニ幣銀ヲ發  
君子ハ人 ス 民賦ノ半ヲ減  
ノ歡ヲ盡 不 山澤ノ禁ヲ弛  
サス 人 不 衣食完カラザ  
ノ忠ヲ竭 ル者十室ニシテ五  
サズ 君 小民俱ニ頼ル  
子ノ交ハ 船税ヲ捐テ以テ舟  
淡シテ水 工ニ便ス 門税ヲ  
ノ如シ 弛ヘ以テ負販ノ民  
小人ノ交 ヲ甦ス 河水ヲ引  
ハ甘シテ キ民田ニ灌グ 外

執カ過ナカラシ能ク之ヲ改ムルヲ貴シトス僕  
思フニ昨日罪ヲ足下ニ得ル足下業己我ニ報ズ  
若シ足下既ニ報スルモノヲ以テ足レリト為ス  
カ則チ僕カ此ニ在リ願クハ手ヲ握テ後朋友々  
ラント沛遂ニ心ヲ輸シテ石交トナル  
○紀那破崙事 土居光華  
千七百九十年中帝其同列ト兵ニ將トシテ佛國  
ノ一邑オーキリンニ屯シ民家ニ寓ス諸同列皆  
其家ノ少婦ト相戯レ日夜談笑嘻嘻々帝獨黙々思  
フ所アルガ如シ苟クモ問暇アレバ則チ一室ニ  
入り書ヲ讀テ休マズ少婦帝ヲ悦ビ帝ノ心ヲ奪  
ハント欲シ百方媚ヲ呈ス帝更ニ之ヲ顧ミス婦

醴ノ如シ 堤ヲ為リ以テ水ヲ  
 膠漆相投 揮ク更ニ小堤ヲ  
 ス 掌ヲ 作リ以テ暴水ヲ揮  
 抵テ一笑 ク 水乃チ害ヲ為  
 ス 藩ニ サズ 百姓陷溺ノ  
 芝蘭ニ化 患ナシ 田野闢ケ  
 ス 青雲 民人給ス 兆庶生  
 ノ交 恩 ナ樂シム 生齒日  
 兄弟ノ如 ニ繁シ 家ニ餘積  
 シ 生テ アリ 民其利ヲ享  
 志ヲ同フ ク 民蘊息ヲ得タ  
 シ死シテ リ 民皆其堵ニ安  
 傳ヲ同フ ンズ 聚歛甚々急

以テ怨トナス 其後帝々位ニ上リ以太利ヲ征ス  
 ルニ方リ途オーキリンヲ經微服往テ其家ヲ訪  
 フ少婦猶在リ帝徐ニ語テ曰ク卿猶ホ那破崙ノ  
 名ヲ記スルヤ婦未ダ其帝タルヲ知ラズ曰ク記  
 セリ彼曾テ妾ガ家ニ寓セリ然ルニ彼常ニ室ヲ  
 開テ書ヲ讀ミ人ト談笑スルヲ好マス又人ト出  
 遊スルヲ喜ハズ偶出ル丁アルモ深沈言少シ故  
 ニ妾毎ニ彼ニ接セント欲スレ氏彼遠ニ妾ヲ顧  
 ミズ彼寔ニ無情男子ナリ帝曰ク卿猶我面ヲ記  
 スルヤ婦熟視シテ曰ク微シク曩ノ那破崙ニ肖  
 タリ非カ帝呵然トシテ曰ク余ハ即チ舊時ノ那  
 破崙ニシテ今日ノ佛帝ナリ婦愕然倒レント欲

曠達

ス 總角 灌漑ノ利ヲ得タ  
 風月主人 固ク開チ以テ價ヲ  
 詩ヲ作 待ツ 旱魃虐ヲ為  
 リ酒ヲ飲 ス 乱徒烏合郷邑  
 ム 山林 ナ攻剽ス 郷寇城  
 雅趣 天 邑ヲ殘掠ス 郡境  
 ナ樂シ命 駭然 豪猾屏息  
 ナ知ル 文太平ヲ致シ武乱  
 道義丘山 略ヲ定ム 天下晏  
 重ク 功 然内外武ヲ弛ブ  
 名草芥輕 境内神明ト稱ス  
 シ 一笑 其便宜處置ヲ聽ス

ス帝曰ク曩ニ我ヲシテ卿ノ容姿ヲ愛セシノ我  
 自カラ我好日月ヲ錯リ曾テ諸同列ト同ジク得  
 ル所ナキニ至ラシノバ今日豈以太利ノ全軍ヲ  
 統督シ歐洲ヲ雄視スルヲ得ンヤ  
 ◎紀科倫布檢出新地事 岡 千仞  
 一千四百九十二年八月十二日瀧ヲ安達臆西並  
 ノ巴魯斯港ニ解シ布時二年五十七西ニ向テ駛  
 ル二十餘日水天際ナク陸地ヲ見ズ水手舟ヲ反  
 サント欲ス布聽カス且諭シテ曰ク此事成ラバ  
 則チ當ニ大賞ヲ得ベシ否ラザレバ則チ國后嚴  
 明必ラズ欺罔ノ罪ヲ正サン更ニ行ク數日國土  
 ナ見ズ水手疑懼布ヲ海ニ投テ舟ヲ反サン丁チ

總テ形ヲ  
忘レ○百  
年都ヲ夢  
ニ付ス○  
久シク切  
名ノ念ナ  
シ○人ニ  
隨テ計ヲ  
為ス○卷  
舒自在○  
白雲舒卷  
○浮世興  
衰○風流

○敬畏勤儉ノ心至  
ラザル所無シ○親  
ラ農桑ノ事ヲ察ス  
○志ヲ厲マシ勤ニ  
服セシム 耘耔冀  
養並ニ其術ヲ盡ス  
○名ハ法ヲ以テ存  
シ實ハ政ニ由テ舉  
カル○名アツテ實  
ナキヲ虚法ト曰ヒ  
實アツテ名ナキヲ  
徒政ト曰フ○毒ヲ  
全國ニ流シ百万ノ

謀ル布之ヲ揣リ知ル衆ト約スラク今ヨリ三日  
陸地ヲ見ザレバ則チ棹ヲ返サン愈行ク水漸ク  
淺シ時ニ小鳥群リ飛ビ樹枝巢ヲ結フ者波ニ隨  
テ漂ヒ來ルヲ見テ其陸地ニ近キヲ知リ愈進ム  
夜半一水手忽チ報ジテ曰ク陸アリ陸アリト衆  
喜極ツテ任セント欲シ布ヲ揮シテ日來ノ無禮  
ヲ謝ス天明ケ日出テ海岸一帶奇卉異葩蔚蒼ト  
シテ天ニ連ナルヲ見ル土人岸上ニ立チ布ノ舩  
ヲ注視シ大ニ駭キ以為ク神大鳥ニ乘ジテ至ル  
ト蓋シ舩ヲ以テ大鳥ト為シ白帆ヲ以テ鳥翼ト  
為スナリ布衆ヲ率キテ陸ニ上リ拝跪シテ土ヲ  
嘗メ上帝ヲ拜シテ其成功ヲ祝ス時二十月十二

三昧 形  
骸ヲ枯木  
トス  
滑誓  
頗ル詭諧  
ヲ好ム  
人之ヲ東  
方朔ニ比  
ス○東方  
朔ハ遺風  
アリ○四  
筵ヲ驚カ  
ス○大ニ

生靈ヲ塗炭ニ擠ス  
其人亡ブレバ則  
チ其政熄ム 輕車  
ヲ肥馬ニ駕シテ峻  
坂ヲ下ルガ如シ  
禦乎トシテ朽索ノ  
六馬ヲ馭スルカ如  
シ 訟ヲ聽ク吾猶  
人ゴトシ必ズヤ訟  
ナカラシメンカ  
法官ハ猶醫師ノ如  
ク人民ハ猶病夫ノ  
ゴトキナリ 獄ヲ

日ナリ此地ハ則チ南北亞米利加ノ中間巴哈麻  
諸島ノ一ナリ布誤リ認メテ印度ノ西極海岸ト  
為シ遂ニ稱シテ西印度ト云フ其舟ヲ繫グ所ヲ  
名ケテ桑撒窠突兒ト云フ桑撒窠突兒トハ洋  
語神聖ノ救護ナリ  
○紀廉爺事 信夫恕軒  
一老爺水郷丸山ニ僑居シ家極メテ貧シ屢ヲ織  
リオニ活ク一日楮幣六七葉ヲ市ニ拾ヒ驚喜舞  
ハント欲ス忽チ一僮ノ泣來リテ物色スルヲ見  
テ故ヲ問フ曰ク主翁ノ命ヲ奉ジ金ヲ懷ニシ以  
テ使シ今諸ヲ道ニ遺ス曰ク吾獲焉其數ヲ問フ  
ニ數符ス乃チ之ヲ還ス其名居ヲ問ヘト告ゲズ

俳優ニ類ス抱腹絶倒ス頤ヲ解カントス常ニ慢戯ヲ好ム大笑シテ纒絶ヘ多智多能言ハ流水ノ如ク胸中ニ出治ルルハ猶史ヲ修スルガコトシ訴訟ノ原因ヲ察シ意ヲ獄事ニ精ニシ其情ヲ得ザルナレ好卷シ伏ヲ摘ハ一神ノ如シ辞簡ニシテ理暢ブ心ヲ持スル光明正大ナリ生民ノ事多端ナリ一ニ成法ノ能ク盡ス死ニ非ズ冤ヲ雪ギ枉ヲ伸

シテ去ル昔者東涯先生遺金ヲ路ニ獲乃チ遺者候チ之ヲ還サント欲シ立待之ニ久フシテ來ラズ因テ之ヲ伊勢ノ神廬ニ納ル世傳ヘテ以テ美談ト爲ス今者爺目ニ丁字ヲ知ラズ且貧困彼ノ如ク而シテ其爲ス所ハ先生ト符ス亦奇ナラズヤ嗟夫レ士ニシテ廉耻ヲ知ラス惟財貨之レ視ル者爺ノ風ヲ聞キ豈愧死セザランヤ記シ以テ世ノ貪欲厭ク無キ守錢奴ニ示ス

○紀蠟燭屋四郎平事 無名氏

享保中江戸室街ニ蠟燭屋四郎平ト云フ者アリ一日市ニ出テ途ニ遺金アルヲ見拾テ家ニ飯リ其母ニ謂テ曰ク百金ハ中人ノ産而シテ何人カ

デ○語ハ懸河ノ如ク口上ニ垂ル○辯論風生○綺談雲擁談言霏々○世ヲ玩ル○縦横自在○一タビ舌ヲ掉カセバ

グ○善ク姦ヲ叢スル者ハ必ズ善ク情ヲ移シ再鞠ス○善ク鉤距ヲ為シ以テ事情ヲ得タリ○裁割精明○發摘神ノ如シ○折獄ヲ以テ声ヲ著ハス○齋問實ヲ得タリ○能ク其實ヲ求メ得テ其誣ヲ辨明ス○毫髮ノ疑アレバ必ズ推

輕忽之ヲ遺ス事不謹ニ出ルト雖凡其困想フ可シ持シ以テ之ヲ返サント欲スルモ都下ノ地廣ク人衆シ之ヲ如何母曰ク汝言極ノテ理アリ隣寺住僧智識人ニ超ユ宜ク就テ之ヲ謀ル可シト四郎平乃チ就テ之ヲ謀ル僧曰ク當ニ熟慮スベシ居ルコト幾モ無ク僧淺忡ニ之ク會一男子ノ被髮鬢然白衣徒跣ニシテ走ル者ヲ見ル怪テ其故ヲ問フ曰ク觀音ニ祈ルナリ曰ク何ヲ祈ル曰ク嚮ニ主家ノ金ヲ途ニ遺ス百方之ヲ索ムレハ獲ズ故ニ之ヲ祈リ其或ハ冥助アラシコトヲ庶幾ナリト僧具ニ其金額ト封狀ヲ問フニ四郎平拾フ處ト一々符合ス是ニ於テ男子ヲ携ヘテ寺

萬人頤ヲ 駭尽ルニ至ル○丁  
 解ク○宛 寧ニ枉直ヲ指教ス  
 モ湧泉、 ○成法アラザレハ  
 如シ○於 則チ慣習ニ依ル慣  
 高シテ四 習無ケレバ則チ之  
 座傾ク○ ヲ條理ニ問フ○深  
 舌ヲ掉フ 文苛察ノ法○舞文  
 テ齊城ヲ 羅織ス○法庭ノ事  
 下ス 公平是貴フ○彼ガ  
 不得志 四分ノ理ハ變ジテ  
 枯魚ヲ賦 十分トナリ我ガ六  
 シ以テ意 分ノ理ハ轉ジテ無  
 チ愈ス○ 理トナル○片詞立

ニ飯リ状チ四郎平ニ告ゲ之ヲ返サシム其人大  
 ニ喜ビ謝スルニ十金ヲ以テス四郎平色ヲ作シ  
 テ曰ク子ガ失フテ子ガ得ル吾何ゾ與ラン固ク  
 辞シテ受ケズ明日其人復來リ謝シ一金ヲ床下  
 ニ投ジ去ル四郎平乃チ其金ヲ懐ニシ出テ淺草  
 ニ之キ路傍ノ乞巧者ヲ見ル毎二人々一錢ヲ與  
 ヘ日暮ニ及ビ猶數錢ヲ餘ス適骨董肆ニ一ノ鋪  
 刀有リ購テ飯リ之ヲ視レバ即チ名刀ニシテ價  
 百金ニ抵ルト云フ  
 ○紀陸奥國兄弟事 失名氏  
 元禄中陸奥ニ兄弟二人アリ善ク父ニ事ヘ常ニ  
 歡チ膝下ニ受ケテ其意ニ違ハズ朝夕餐ヲ進ム

才有テ用 二決ス○獄ノ疑ハ  
 ヒラレバ シネハ輕キニ從フ  
 ○薪ヲ賣 ○悉ク大群ニ真ク  
 リ冠ヲ得 ○遂ニ之ヲ法ニ置  
 タリ○大 ク○爰書ヲ將テ細  
 器晚成○ 二閱スル一過○一  
 誰ク不遇 切繩スニ法ヲ以テ  
 ナ構マサ ス○疑獄滯訟ニ臨  
 ランヤ○ ムニ至リ立トコロ  
 坎珂浴々 二其情ヲ得ル○証  
 ○壮志消 憑無キヲ苦シム○  
 創○海ニ 事遂ニ白ス○之ヲ  
 横ハル長 驗スルニ果シテ然

ルニ父食ヘハ則チ喜ビ食ハサレバ則チ憂フ父  
 嘗テ餅ヲ嗜ム兄弟毎朝市ニ之キ餅ヲ買ヒ其新  
 ニ製シテ温暖ナル者ヲ覓メ走り飯リテ之ヲ進  
 ム一日父痢ヲ病ム兄弟大ニ憂ヘ醫ヲ乞フテ診  
 視セシム醫曰ク體己ニ老衰シテ痢疾之ニ乘ズ  
 是必死ノ症也藥石ノ及ブ處ニ非ズ宜シク食禁  
 ナ解キ其意ニ任ス可シト家人皆以テ然リト為  
 ス兄弟家人ヲ戒ノテ曰ク慎ンテ醫言ニ從ヒ藥  
 餌ヲ懈ル勿レ且病治ス可ラズト雖凡堂藥ヲ  
 下サバルノ理アランヤ乃チ更ニ良醫ニ就キ治  
 ナ請ヒ百方カヲ盡シ奉養備ニ至ル病遂ニ愈ル  
 一ヲ得タリ其後國主兄弟ノ孝ヲ賞シ米若干苞

言傳 文傳 卷之中

鯨○一身  
 多難○老  
 驥豈敢テ  
 千里ヲ期  
 センヤ○  
 咄々空ニ  
 書ス○文  
 章固ヨリ  
 一文錢ニ  
 直ラズ○  
 高才ヲク  
 人ニ忌マ  
 ル○半夜

リ○鍛鍊獄ヲ成ス  
 ○法ニ及致ス○  
 情狀ノ是ニ非サル  
 ナ覺フ○其冤アル  
 ナ意フ○手カラ供  
 狀ヲ書ス○之ニ對  
 証セレム○其人ヲ  
 物色シテ之ヲ訊ス  
 ○小民冤枉ヲ致サ  
 ビル者幾ンド希ナ  
 リ○風俗人情殊ナ  
 レハ則チ法律セ亦  
 隨テ斟酌セザルチ

ナ賜フテ里門ヲ旌表ス兄ノ名ヲ利三郎ト曰ヒ  
 弟ヲ吉十郎ト曰フ  
 ○紀平野喜四郎事 失名氏  
 江戸銀座街ニ平野喜四郎ト云フモノアリ嘗テ  
 坐セラレテ伊豆三宅島ニ流サル家奴彌平日夜  
 痛傷シ一タヒ其主ニ謁シテ情ヲ慰センチ思ヒ  
 乃チ航海術ヲ學ブ數年遂ニ幕府軍艦水手ト為  
 リ始テ島ニ抵ルチ得クナリ乃チ其主ニ謁シ別チ  
 叙スル數日餽遺心ヲ盡ス後喜四郎赦ニ遇フテ  
 飯ル彌平其家ヲ經紀シ産ヲ傾ケテ供給スト云  
 ○紀大椿事 失名氏  
 應仁中九州ニ大椿トイフ者アリ少ヨリ思チ學

唾壺ヲ擊  
 テ歌フ○  
 世ト疎ナ  
 リ○欽岨  
 歷落○百  
 年ノ素業  
 ○英雄未  
 路○誰カ  
 飲牛ノ歌  
 ナ作ル  
 感慨  
 倂仰感慨  
 ○情事ニ

得ズ○佛國法律ノ  
 精天下ニ冠タリ○  
 天下ノ法律ヲ言フ  
 者必ズ那翁ヲ稱ス  
 ○健訟ノ俗日ニ盛  
 ニ行ハル○民法ハ  
 猶兵法ノゴトシ百  
 万ノ人馬依テ以テ  
 統制スル處ナリ○  
 運用ノ妙何啻兵法  
 ノミニナランヤ○  
 其變通ニ至テハ則  
 ナ唯能ク之ヲ運用

ニ潜ム是時ニ當リ海内戰乱人皆干戈ニ從事シ  
 學問ノ何物タルヲ知ラズ故ヲ以テ經史ヲ雕刻  
 スル者甚ダ希ナリ大椿一日書師ヲ過キ四子六  
 經ノ白本ヲ覓メテ得ズ遂ニ常陸ニ趣キ僅ニ一  
 本ヲ購求シ師ニ就テ句讀ヲ受ケ居ルコ歲餘孟  
 子ヲ講讀シ而シテ學資己ニ罄ク乃チ舊知ニ就  
 キ豆一斗ヲ乞ヒ炒シテ之ヲ食ヒ五十餘日ニシ  
 テ遂ニ其業ヲ卒フ又易ヲ讀ント欲シ而シテ豆  
 亦盡ク乃チ卿ニ歸リ學資ヲ辨ジ復タ常陸ニ之  
 キ竟ニ易理ニ通ズト云フ  
 ○紀閔金重事 失名氏  
 美濃ノ人閔金重年六十一相摸ノ人鎌倉五郎正

記傳 文傳 卷之中  
 紀事門  
 十三

隨テ遷ル  
 時ニ感シ  
 テハ鳥モ  
 心ヲ驚カ  
 ス○心折  
 レ骨驚ク  
 ○俯仰ノ  
 間己ニ陳  
 迹ト為ル  
 ○萬斛ノ  
 新愁○舊  
 ニ感シテ  
 浩然○江

スルニ在ルノ頗  
 ル姦猾ノ心ヲ懲ラ  
 ス○大罪必不誅シ  
 小罪ハ必シモ問ハ  
 ズ○蓋シ壅滯ノ弊  
 アルヲ慮ルナリ○  
 聚議公論以テ其功  
 罪ヲ判ツニ非ザレ  
 バ不可ナリ○審判  
 ノ法宗皆之ヲ天下  
 ニ公告シ○天下ノ  
 訟ヲ聽ク者亦其輕  
 重スル處ヲ知ラン

宗年二十九同時ニ並ヒ稱セラレテ刀劍ノ名匠  
 タリ金重一日正宗鍛フ所ノ銳利比ナキヲ觀テ  
 嘆ジテ曰ク吾自カラ如カガルヲ知ルナリ遂ニ  
 鐵倉ニ之キ正宗ノ弟子タリ業就リ郷ニ皈ル年  
 己ニ七十乃チ日ニ鍛法ヲ試ミ時ニ正宗鍛フ處  
 ノ刀ヲ把リ之ヲ視ルニ堅利或ハ之ニ過ルモ光  
 鈍ハ復ニ及ブ能ハザルナリ是ニ於テ金重大ニ  
 發奮シ復タ鐵倉ニ之キ留學前後凡ソ十四年遂  
 ニ諸國ヲ歴遊シ大ニ名譽ヲ得タリ元亨二年越  
 後ニ客死ス年九十餘ナリト云フ

紀良秀事 伊藤仁齋

昔日畫工良秀ト云フ者アリ善ク佛像ヲ畫ク一

山是ナリ  
 ト雖凡昔  
 人非ナリ  
 ○意ノ如  
 クナラサ  
 ル丁常ニ  
 七八○與  
 ニ語ル可  
 キ人二三  
 無シ○方  
 寸ノ中萬  
 斛ノ愁ア  
 リ○愁心

○外人其長喙ヲ肆  
 ニスルヲ得ズ○証  
 ニ依リテ罪ヲ斷ス  
 ○罪ヲ斷ズルニ證  
 ヲ以テスル者深ク  
 民命ヲ重ンズル所  
 以ナリ○一証一據  
 以テ他人ノ生命ヲ  
 輕重スルニ足ル○  
 無力無援ノ孤囚ヲ  
 以テ有威有權且法  
 律ニ通曉スルノ訟  
 者ニ對ス峻法ノ下

日隣家忽チ火ヲ失シ延ヒテ其家ニ及ブ秀家財  
 番物ヲ顧ミズ倉皇趨リ門外ニ出ヅ人皆以テ驚  
 怖措ヲ失フト為ス秀火ヲ觀テ嘉嘆スルモノ之  
 ニ久シ乃チ首ヲ顛シ手ヲ揮ヒ左右瞻視歎嘉踊  
 躍シテ己マズ見ル者驚怪シ以テ狂ト為ス秀曰  
 ク吾幼ヨリ今ニ至ルマデ不動尊ヲ繪ク一其幾  
 千百幅ナルヲ知ラズ然レモ其火燄ヲ画クニ當  
 リ筆淡リ氣褻ハレ卒ニ意ノ如クナル能ハズ今  
 我忽チ画法三昧ヲ得自カラ手之ヲ舞ヒ足ノ之  
 ヲ踏ムコトヲ知ラザルノミ我豈資財ヲ惜マザ  
 ランヤ意ヲニ彼ヲ以テ此ニ易フル能ハザルノ  
 ミト世其畫ヲ傳ヘテ至寶トナス夫レ画學ハ小

城ヲ成ス 罪犯少ク加ヘズ  
 滿目ノ江 緩律ノ世罪犯多キ  
 山感慨之 ヲ加ヘズ  
 峻法ヲ 畏怖シ緩律ヲ輕侮  
 ス  
 ○刑法苛酷ナル 者ハ能ク民ヲ一時  
 ニ制ス  
 ○慣習已ニ 久シク民其猛ヲ忘  
 ル  
 ○罪犯ノ多寡ハ 為政ノ得失ニ在リ  
 ○罪犯ノ増減ハ刑 律ノ寬嚴ニ在ラズ  
 ○或ハ嚴ニ過キ或

藝ノミ然ルニ心ヲ專ニシ志ヲ致シ唯畫之レ耽  
 リ其他ヲ恤ヘザル此ノ若キニ非ザレハ則チ自  
 カラ其妙ニ臻ル能ハス學者聖人ノ道ヲ為ルニ  
 存スル如ク亡ブル如ク或ハ作シ或ハ輟ミ悠々  
 歲月卒ニ其藩閫ニ造ル能ハズ况ヤ室與ニ入ル  
 ニ於テチヤ亦秀ノ罪メナリ予適俗間傳フル處  
 ノ物語ナル者ヲ讀ミ良秀ノ事ヲ得テ乃チ慨歎  
 ニ勝ヘズ因テ學者ノ為ノニ表シテ之ヲ出ス  
 ○紀鍛工事 飯島某  
 鍛工某甲曾ヲ製スルヲ以テ著ハル嘗テ第一世  
 拿破崙某ヲシテ堅甲ヲ製セシメシテ欲シ之  
 ニ謂テ曰ク汝善ク我が為メニ一銃九モ亦貫ク

祇琴老ト ○細ニ落  
 花ヲ數ヘ ○緩ク芳  
 草ヲ尋ネ ○開花半  
 落チ○鳥 鳥雙ヒ飛  
 ○遊絲 地ニ到ル  
 ○東籬ニ 菊ヲ把リ  
 ○竹ニ灑 之ヲ私スルヲ得ズ

ハ寬ニ失ス○吏法 極メテ嚴ナリ○嚴  
 刑ハ民ヲ威スニ足 ラズ○官吏訟ヲ受  
 ケ人民以テ枉ヲ伸 ブ○國隱律ヲ用ヒ  
 人民ヲシテ知ル能 ハザラシム○人民  
 ノ法ニ於ケル猶雲 霧ヲ披テ青天ヲ觀 ルガ如シ○法律天  
 下ニ公ニシテ有司 之ヲ私スルヲ得ズ

能ハザルノ甲曾ヲ製セバ與フルニ一千万花令  
 其ヲ以テセント其諾シテ去ル數日ヲ過ギテ一  
 甲曾ヲ製シ來レリ拿破崙直ニ其ヲシテ其甲曾  
 ヲ撰セシメ自カラ短銃ヲ腰間ヨリ出ダシ一發  
 シテ之ニ中ツ果シテ貫クヲ能ハズ因テ再ビ銃  
 槍ヲ把リテ之ニ中ツ亦貫クヲ能ハズ拿破崙乃  
 チ左右ニ令シテ一巨砲ヲ輓キ來ラシメ將ニ試  
 ルニ巨丸ヲ以テセントス衆某ノ為メニ寒心セ  
 ガル者ナシ而シテ其猶從容トシテ色動カズ拿  
 破崙辭ヲ拊チ嘆ジテ曰ク吾其甲曾ノ堅キヲ知  
 レリト與フルニ三千万花令其ヲ以テセリト云  
 フ虚心子曰ク甲曾堅シト雖モ安ンゾ善ノ銃九



ギ泉ヲ引  
釣竿把ル  
ニ慵キハ  
魚ヲ驚サ  
ンヲ恐ル  
、ナリ○  
浮生半日  
ノ閑○平  
生一盃ノ  
酒ニ負ク  
莫レ○簾  
ヲ開テ燕  
ノ飯ルヲ

○權衡ノ差酌量ノ  
誤リ○其人ヲ以テ  
命ヲ償フ○未減ニ  
從ハントス○雪活  
百ヲ以テ數フ○其  
家ヲ籍没ス○縣官  
ニ没入ス○古者羅  
馬ニ法律十三章ア  
リ西洋諸國概ネ之  
ニ援ル○那翁翁ノ  
起ルヤ諸ヲ七十年  
間ニ驗シ擴メテ二  
千二百八十一章ト

一發決シテ貫カザルコトヲ自信ズルニ足ラン  
ヤ縱令之ヲシテ貫カザルコトヲ自信セシムルト  
モ亦安ンゾ自ラ傷カザルコトヲ信スルニ足ラン  
ヤ況ンヤ巨砲ヲ以テ之ヲ射彈スルヲヤ而シテ  
鍛工從容トシテ其之ヲ發ツヲ待ツ者至愚ナル  
ニ似タリト雖モ其自信スルコトノ固キニ至テハ  
以テ一世ノ英雄ヲ感セシムルニ足レリ豈尋常  
工人ノ能ク及ブ處ナランヤ嗚呼自信スルノ固  
キハ巨砲モ亦之ヲ貫クコト能ハザルカナ

○紀熊澤助八事 林 鶴梁

備前州ニ富民兄弟家資ヲ爭フ者アリ黨援各百  
餘人獄官推訊累年斷ズル能ハス熊澤助八代リ

待ツ○簾  
外ニ山ヲ  
擁ス  
珍寶類  
琉璃寶貝  
○水精○  
玻璃○琺瑯  
渠○瑪瑙  
○琥珀○  
珊瑚○光  
澤爛然○  
○光彩人  
ヲ射ル○

ス○罪犯ノ源流ヲ  
明ニシ以テ立法ノ  
基礎ト為ス○輕重  
差等錙銖ヲ遺サズ  
○本源立テ支流張  
ル○有テ通ジ無ニ  
貿フ是互市ノ本旨  
○彼我ノ針路日ニ  
開ケ互市日ニ盛ナ  
リ○地球ヲ舉ゲテ  
一大市場ト為ス○  
風ニ駕シ浪ヲ破リ  
万里比隣來往自在

テ獄官ト為ル乃チ兄弟二人ヲ召シ同ジク一室  
ニ坐セシム時ニ冬日嚴寒一火炉ヲ堂ノ中央ニ  
置キ終日問フ處ナレ日暮ルニ及ビ盤餐ヲ出シ  
二人ヲシテ並ビ喫セシム此ノ如クスル者三日  
而シテ助八毎ニ屏障ヲ隔テ坐シ其二兒ニ命シ  
事ヲ膝下ニ執ラシム二兒ノ友愛孺ノ如ク篋ノ  
如ク暗ニ二人ヲシテ之ヲ聽カシム二人心ニ其  
已ヲ諭スヲ曉リ愧心自然ニ胸ニ縈ル初ノ二人  
ノ堂ニ入ルヤ各分テ一偏ニ坐ス是ニ至テ相謂  
ラク寒甚シ火邊ニ近クベシト既ニ近ケバ覺エ  
ズ相與ニ手ヲ執テ蹄哭シ宿怨頓ニ消ス乃チ退  
テ党援ニ告ゲ訟ヲ止ムト云フ噫其數年ノ疑獄

紅爛燬ス  
ベシ○潤  
澤鑑ス可  
シ

○高二機アリ權アリ操縦ノ術アリ○一敗地ニ塗レザル者殆ンド希ナリ○富國強兵ノ基是ニ

珠玉

由テ起ル○機ヲ察テ策ヲ施ス○忍耐

白ハ截肪

テ策ヲ施ス○忍耐

ノ如ク○

屈セズ以テ此大捷ヲ得タリ○才俊ノ

赤ハ雞冠

士ハ往々カチ陶朱

ノ如ク○

猗頓ノ業ニ致ス○

黒ハ純漆

貿易ノ利ハ輸入ニ

ノ如ク○

在リ亦輸出ニ在リ

交米外ニ

露ハル○

在リ亦輸出ニ在リ

玉山ニ在

○其人ト約スル一

テ水潤フ

ニ正實信義ヲ以テ

内ニ紅光

本トス○之ヲ彼ニ

アリ○連

取テ以テ是ニ補フ

城價重シ

○金貨濫出シ府庫

○名ケテ

一空○衣服器用皆

至宝ト為

外輸ニ仰グ○製出

ス○温潤

尤モ多クシテ沽却

ニシテ澤

スルヲ得ズ○千百

フ○玷無

人中暴富ヲ致スア

ク瑕ナク

リ○將ニ大ニ貿易

○藍田種

ノ道ヲ擴張セント

フル處○

ス○其利皆外人ノ

寸舌ヲ勞セズシテ而シテ一朝之ヲ息ムルハ善ク訟ヲ聽ク者ト謂ベシ然ルニ其履行素ヨリ信ヲ人ニ取ルアルニ非ズンバ豈此ノ如キニ至ラニヤ世ノ刑官タル者其レ之ヲ思ヘ

紀岡本嘉藏事

失名氏

岡本嘉藏ハ備中哲多郡長屋村ノ人也初ノ郡中ニ断崖絶壁アリ直立數十仞徑凡ソ五十歩長屋蟹ノ兩林ヲ阻絶シ路ノ來往ス可キ無シ其下ニ澗水アリ急流激湍橋ヲ架ス可ラズ土人短ヲ兩岸ニ張り小艇ヲ以テ人馬ヲ渡ス苟クモ少シク戒ノザレバ則チ岩石ニ衝突シ船立トコロニ粉塵ス里人旅客其危險ヲ憚ル然レ此ヲ經ルニ

非ザレバ以テ前村ニ達スル莫シ故ヲ以テ利涉ヲ冒シ深溝ニ溺投スル者往々有焉嘉藏既ニ工匠ヲ業トス嘗テ大息シテ曰ク人ノ世ニ在ルヤ人事ヲ益シ世用ニ供スルニ在ルノニ而シテ余貧賤ニ生長シ小技ニ從事シ且才ノ以テ世ニ裨益ス可キ無シ豈遺憾ナラズヤ然レ臣余幸ヒニ土功ノ事ニ慣ル冀クハ我手腕ヲ以テ彼ノ岩石ヲ鑿チ澗水ヲ堙塞シ以テ里人旅客ニ便セバ亦以テ少シク素願ヲ償フニ足ランカト是ニ於テ益力ヲ匠事ニ用ヒ餘資ヲ貯蓄シ以テ木材釘錐ノ費ニ充テ遂ニ單身山中ニ入り榛茅ヲ誅シ棧道ヲ築キ岩石ヲ鑿チ土石ヲ深淵ニ投シ明治庚

德高シテ  
君子ニ比  
シ○價重  
ク連城ニ  
抵ル○山  
川將ニ潤  
ヲ借ラン  
トス○符  
彩滄海ヲ  
照ス○鑑  
積深ク載  
ス○沽我  
沽我○其

手ニ飯ス○貿易品  
中推シテ第一等ト  
為ス○牙籌上常ニ  
損害ヲ見ル○奇利  
ヲ一舉ニ占ム○輸  
贏ヲ瞬間ニ決ス○  
散ジテ外國毒商ノ  
利源ト為ル○我ガ  
彈丸黒子ノ一孤島  
○四面海ヲ環ラレ  
運輸煩ル便ナリ○  
歐人利ヲ見ル百折  
屈セズ高賣ノ權皆

午三月ヨリ役ニ就キ壬申三月ニ至リ功ヲ竣へ  
二年ノ久シキ末ダ嘗テ一日モ廢セバ竟ニ能ク  
嶮道ヲ闢キテ坦途ト為シ深淵ヲ埋ギテ淺瀬ト  
為シ一錢ノ費一貫ノ功モ末ダ嘗テ他人ノ力ヲ  
仰ガザルナリ里人其功ヲ嗟嘆セザル者ナシ相  
共ニ謳ヲ作シテ曰ク山ヲ夷ゲ谷ヲ堙ノ茲ニ坦  
途ト作ス昨組ニ憑テ渉ル今以テ徒ス可シト幾  
ナクシテ事官ニ聞エ吏ヲシテ其地ヲ檢セシム  
ルニ果シテ效アリ乃チ其功ヲ賞シ賜フニ金若  
干ヲ以テスト云フ

○紀卯兵衛谷平事 中井履軒  
上毛新田郡ニ酒井村アリ秋社肆ヲ張り市ヲ為

色瑩然○  
精愈精○  
水珠ヲ懷  
ヒテ川媚  
ブ○良珠  
寸ニ度ル  
○百俛ノ  
水アリト  
雖比其輝  
ヲ掩フ能  
ハズ○但  
是連城ノ  
珍○徑寸

外人ノ手ニ落ツ○  
經濟ノ道猶水ヲ治  
ムルガ如ク○其自  
然ノ勢ニ因ルノミ  
○水涌テ泉ト為リ  
湧シテ潭ト為リ魚  
リテ湖ト為リ流レ  
テ川ト為ル○亦唯  
勢ニ因テ利導シ其  
ヲシテ涌涵雅流ノ  
故形ニ復セシムル  
ノミ○外邦貨物ノ  
輸入甚ダ多ク○經

ス尾島村ニ販魚谷平トイフモノアリ市ニ適キ  
途安養寺村ヲ經ル墓上ニ烏鵲噪グ甚ダシ谷平  
謂ヘラク墓間何ノ怪異アルカト旅行シテ之ヲ  
矚フニ文蛇ノ碑間ニ横ハルヲ見ル谷平謂フ是  
也之ニ頃シテ蛇動カズ漸ク就テ之ヲ視レバ則  
チ棉絲綵緜笑之ヲ牽ケバ則チ衣囊出ツ之ヲ啓  
ケバ則チ金五十兩封ニ題シテ卯兵衛ト為ス谷  
平大ニ駭キ尋思シ謂フ安養寺村唯一姐アリ多  
貴善價數十里内復多財ノ卯無シ渠且市ニ適テ  
之ヲ遺スナリ乃チ金ヲ懷テ往ク卯果シテ肆ニ  
在リ歸テ問ヒ曰ク君遺ス處有リヤ卯頭ヲ掉ヒ  
曰ク否々谷平詔フ衆ニシテ之ヲ言フ吾ノ過ナ

言傳 卷之中

ノ珠車ノ 濟ノ津梁是ニ外ナ  
前後ヲ照 ラズ○金ヲ人ニ托  
ス各十二 セズ空シク之ヲ籠  
衆○明月 底ニ藏サム○之ヲ  
ノ珠夜光 官庫ニ蓄ヘ敢テ諸  
ノ壁○暗 外ニ出サズ○内  
中ニ投ズ 地ニ滞積スルノ物  
レバ人劍 産多カラズトセズ  
ヲ按ジテ ○其人心力ヲ勞セ  
相賜セサ ズシテ私利ヲ擅有  
ルハ莫シ ス○工業漸ク減ジ  
○鳳明珠 物價漸ク昂カル○  
ヲ啣テ庭 志盈チ氣怠リ出ハ

リ乃チ之ヲ去リ鬻酤市散ジテ復往キ就テ問ヒ  
曰ク君遺ス處有リヤ卯曰ク否々谷平謂フ猶他  
人ノ室ニ在レバナリ亦吾ノ過矣又之ヲ去リ其  
飯ルヲ時トシテ其家ニ踵リ見ント請フ卯曰ク  
何ノ言フ所ゾ谷平曰ク君必ズ遺ス所アルナリ  
盍ゾ我が為メニ之ヲ言ハザル卯曰ク否々谷平  
愠テ曰ク五十ノ金題シテ卯ト云フ者君ニ非ズ  
シテ復何ノ卯ゾヤ囊ヲ取り其前ニ投ジ因テ金  
ヲ得ル所以ノ者ヲ告グ卯金ヲ受ケ肯ゼズシテ  
曰ク此我之ヲ遺スモ既ニ吾ノ有ニ非ズ而シテ  
子之ヲ拾ヘバ即チ子ノ財矣吾何ゾ與焉谷平曰  
ク吾之ヲ拾フニ非ザルナリ諸ヲ君ニ還サント

ニ致ス○ 入ヲ償ハス○非常  
徑寸ニ盈 ノ事業ヲ興ス者ハ  
テ純白○ 必ク非常ノ金糧ヲ  
海明珠ヲ 要ス○有用ノ財ヲ  
出シテ夜 費シ以テ無用ノ事  
光ヲ放ツ ニ從ハントス○縮  
○和壁隨 張時ニ從ヒ順環機  
珠○光明 二應ズ○帝ニ國家  
錯落 二補ナキノミナラ  
金幣○青 ズ及テ其疲弊ヲ致  
蚨○孔方 ス○若夫レ不急無  
兄○利源 用ノ事姑ク之ヲ置  
テ問ハザル可ナリ

欲ス故ニ之ヲ舉ル耳因テ相譲リ皆肯テ取ラズ  
卯又之ヲ思フ良久シク熟視シ言テ曰ク子強辨  
我ニ抗ス又能ク天ニ抗スル歟曰ク能ハズ卯乃  
チ曰ク我市ニ適キ過テ墓ニ挿ス事ナキナリ夫  
レ金ハ人ノ重ンズル所而シテ我偶之ヲ遺ス豈  
天ニ非ズヤ鵲噪キ蛇偃シテ子ヲ導キ之ヲ拾ハ  
シムルモ亦天也卯兵衛天ニ違フテ金ヲ取ルチ  
得ズ谷平亦安ゾ天ニ違フテ金ヲ還スチ得ンヤ  
谷平嘿然之ニ久シテ乃チ言ヒ曰ク谷平天ニ違  
ハズ天他人ニ之ヲ拾ハシメバ則チ他人ノ有ナ  
リ谷平ハ義苟クモ取ラズ拾フアレバ必ズ主チ  
訪フテ還ス者ナリ今天苟クモ取ラザルノ谷平

記傳 卷之中 紀事門 十九

四海ニ通ズ  
○體轉  
輪ノ如シ  
○誰乾坤  
ヲ弄シテ  
鑄テ錢ト  
為ス○鯨  
父ノ大錢  
○輕影錢  
○方圓制  
有リ○方  
兄ノ勢  
天ヲ衝ク

○莫大無量ノ産ヲ  
開キ數千萬人ノ生  
活ヲ資ク○日新ノ  
説アリト雖モ曾テ  
事實ニ補ヘシ○製  
造工業漸ク衰微ニ  
屬ス○人ヲシテ技  
術巧藝ノ間ニ遊バ  
シム○資本ヲ運用  
シテ工民ヲ使役ス  
○全國ノ需用ヲ舉  
ゲテ外人ノ供給ニ  
資ル○富國ノ源ハ

ヲシテ之ヲ拾ハシム谷平則チ主ヲ訪テ還ス是  
天道ヲ奉スルナリ君鳥ゾ復辭スルヲ得ン言畢  
リ趨リ出ヅ卯猶囊ヲ提ゲテ之ヲ追フヘ氏及バ  
ズ歳ノ竟ニ至リ米三苞金二方ヲ餽リ谷平ノ壽  
ト爲ス歳以テ常ト為レ谷平ノ身ヲ終ハル卯親  
ニ事ヘテ孝親没シ將ニ他ニ適ントスンバ必ズ  
墓ニ謁シテ告ヅ反ルモ亦之ノ如シ恒ニ施與ヲ  
好シ村中窮乏者ハ賑ハシ力業者ハ賞ス終ニ臨  
ニ遺命シ稲麥三倉急アリト雖モ輒ク糶ルヲ得  
ズ必ズ新旧ヲ交ヘ曰ク三倉以テ一村ノ饑ヲ濟  
フニ足レリト其善ク財ヲ治ムルヲ以テ毎ニ施  
シ散シテ財常ニ餘有リト云フ

○流通圖  
滑○圓轉  
滯ラズ○  
泉流滾々  
○貨泉地  
上ニ流レ  
○國法民  
間ニ敷ク  
○能ク人  
ヲシテ笑  
ハレメ復  
メヲシテ  
泣カシム

勸業ニ起ル○殖産  
本ハ勉力ニ生ズ○  
天然ノ物品ニ就テ  
人工ノ製造ヲ加フ  
○意ヲ製造ニ用フ  
ルヲ知ラザレハ則  
千百年ヲ經ルト雖  
モ輸入ノ源ヲ塞グ  
能ハズ○數千ノ男  
女ヲシテ齊シク工  
業ニ従事セシメハ  
國ノ富饒以テ期ス  
ビレ○其品位終ニ

○蚕松鷺  
安井息軒

飢肥ノ南五里ヲ蚕松ト曰フ地海ニ枕ミ而シテ  
江其内ヲ瀕リ衆鳥聚ル雖鷺アリ日毎ニ出テ海  
ニ扇シ浮魚ヲ攫ミ空ニ冲リ悲鳴ス須臾ニシテ  
鷺アリ來テ下ニ盤フ雖鷺其下ニ至ルヲ候テ攫  
ム所ノ魚ヲ投ズ鷺仰テ之ヲ受ケ以テ去ル率ネ  
以テ常トナス鷺或ハ承ル能ハズ誤ツテ之ヲ海  
ニ墜セバ雖鷺直ニ下テ之ヲ擊ツ鷺敢テ抗セズ  
甘ジテ一撃ヲ受ケ然トシテ往ク鷺ハ鳥ノ至  
猛ナルモノナリ其下撃ノ時ニ方テ力之ト抗ス  
ル能ハザルニ非ズ蓋シ彼其心カヲ盡シ朝饑ヲ  
忍デ以テ我ニ供ス而シテ我ハ則チ誤テ之ヲ墜

○榮辱ヲ 輸入者ニ及バズ○  
 隻手ニ握 外人輸入ノ源ヲ絶  
 ル歡ト悲 チ以テ類勢ヲ維持  
 トハ一ニ ス○數年ヲ出ズレ  
 方兄ノ身 テ成功ヲ奏スベシ  
 ニ在リ○ ○功ヲ成ス易クシ  
 之ヲ得レ テ費用亦省ク○終  
 バ以テ貴 ニ功ヲ竣リ績ヲ致  
 ク之ヲ失 ス○能ク此功ヲ成  
 へバ則チ ス所以ノモノハ耐  
 賤レ○能 忍不撓ノ氣象ニ在  
 ク人ヲ榮 リ○天下ノ人皆其  
 スト雖 功ヲ稱ス○眞ニ是

ス其曲我ニ在リ若又カヲ持シ以テ之ヲ劫セバ  
 彼將ニ翰ヲ奮テ遠擧シ以テ其踪ヲ滅セントス  
 安ゾ朝々其利ヲ亨ル所アラシヤ故ニ寧ロ小辱  
 ナ忍デ以テ其氣ヲ伸ベ彼ヲシテ畏テ敢テ懼レ  
 ズ懷テ敢テ狎レズ以テ其功ヲ我レニ效サシム  
 嗚呼智ナリ而シテ道存ス雖鳩亦能ク驚ノ勢ヲ  
 志レ敢テ其過ヲ規シ再献以テ貪ヲ啓キ命ニ違  
 テ以テ罪ヲ賈ラズ制ヲ驚ニ受クト雖凡而シテ  
 其威ニ因リ以テ自ラ殺鳥ノ間ニ尊フス亦小蟲  
 ノ矯々タルモノナリ  
 ◎紀大石良雄僕八助事 青山延光  
 八助ハ良雄ノ僕ナリ赤穂滅ヒ良雄城ヲ出テ尾

亦天ヲ辱 無盡蔵ナルモノナ  
 シム○其 リ○天下元棄ツベ  
 徳亦大笑 キノ地ナシ○何グ  
 我 其財ヲ用フルノ少  
 飲食類 フシテ澤ヲ施スノ  
 茶 長キヤ○民其利ヲ  
 紫者ヲ上 蒙ムル計ル可ラズ  
 トレ緑者 ○港頭水淺フレテ  
 ハ次○第 繫泊ニ便ナラズ○  
 者ハ上ヲ 解船ヲ以テ貨物ヲ  
 者ハ次○ 搬運ス○所謂天工  
 之ヲ飲ソ 補ヒ庶民ヲ利ス  
 バ人ニ可 ル者ニアラズヤ○

崎村ニ寓居シ將ニ居ヲ京師ニ移サントス時ニ  
 八助既ニ老シ陋巷ニ退去ス乃チ往テ良雄ニ見  
 エテ曰ク奴聞ク主將ニ遠ク山科ニ徙ラントス  
 奴宜シク從フベキモ老テ能ハズ願ハクハ一物  
 ナ賜ヒ以テ家ニ珍藏スルヲ得ン良雄曰ク社稷  
 倫喪レ進退維谷マルハ汝ノ知ル處ナリ吾將ニ  
 居ヲ僻地ニトシ耕芸ニ身ヲ終ヘントス汝ト別  
 レ去レバ復見ル期ナシ聊カ此ヲ留メ以テ別ヲ  
 為スト乃チ十餘金ヲ以テ之ニ與フ八助怒テ曰  
 ク老奴ノ來謁スルハ主ガ手澤ノ存スル所ノ一  
 品ヲ得朝夕之ヲ奉ジ以テ尊容ニ代拜セント欲  
 スルノミ奴老悖ト雖凡豈賜金ヲ貧ルガ為ノニ

ナリ○人  
チレテ睡  
ラザラシ  
ム○一梳  
喉吻潤ヒ  
○二梳孤  
問チ破ル  
○三梳枯  
腸ヲ搜ク  
ル唯文字  
五千卷ア  
リ○四梳  
輕汗ヲ榮

水道梗塞シテ終ニ  
廢渠ト為ル○大ニ  
役徒ヲ起シ咄嗟奔  
走ス○善ク地形ヲ  
相シテ水利ヲ論ズ  
○皆故道ニ依テ疏  
通ス○水開新ニ開  
ケバ江勢沛然タリ  
○數年ヲ出スレテ  
浩業就ル可シ○未  
ダ荒蕪ノ地アルヲ  
免レズ○凸處之ヲ  
削リ凹處之ヲ埋ム

レテ來ランヤ今ヤ國君横ニ禍酷ニ罹リ卑賤奴  
ノ如キモ猶且切齒ス而ルヲ況ンヤ世國恩ヲ荷  
フテ肉食スル者ヲヤ何ゾ乃チ身ヲ辱ノ氣ヲ縮  
メテ國耻ヲ思ハス竟ニ一人ノ復仇ノ志アル者  
無キヤト乃チ金ヲ抛チ慟哭ス良雄然然之ニ父  
シテ曰ク吾過矣ト乃チ筆ヲ攪リ一士又ノ笠ヲ  
載キ微行シ蒼頭後ニ從フノ狀ヲ寫シ皆長刀ヲ  
佩ブ意態奮然蓋シ復仇ノ意ヲ寓スルナリ因テ  
八助ニ謂テ曰ク吾嘗テ江戸ニ在リ汝ヲ從ヘテ  
北里ニ遊ブ汝頗ル記スル否ヤト八助熟視之ニ  
父フレ忽チ其意ヲ曉リ大ニ喜デ曰ク何ノ賜カ  
之ニ如カン涕ヲ流シ曰ク談シ辭訣シテ去ル又

ス平主不  
平ノ事盡  
ク毛孔ニ  
向フテ散  
ズ○五梳  
肌骨清シ  
○六梳仙  
靈ニ通ズ  
○七梳喚  
スルヲ得  
ズ也ダ惟  
兩腋習ニ  
清風ノ生

○稍其中ヲ高フシ  
左右ヲ平濤ニス○  
心ニ得テ手ニ應ズ  
之ヲ運用ノ妙ト云  
フ○必ズシモ身其  
事ニ任セザルナリ  
○情交際ヨリ親シ  
キハ無し○事交際  
ヨリ難キハ無し○  
痛痒相関シテ軫域  
ヲ分タズ○制度文  
物一ニ彼ニ模擬ス  
○丸ソ以テ俗ヲ成

傳ヘテ以テ美談ト為ス  
○紀近松行重僕甚三郎事 全  
近松行重ノ僕甚三郎行重ト郷ヲ同フス從フテ  
江戸ニ至ル一日行重甚三郎ヲシテ郷里ニ還ラ  
シム甚三郎曰ク奴ヲ以テ之ヲ觀レバ諸君ノ事  
ヲ舉グルハ近キニ在リ奴ノ君ニ從フヤ奴ノ父  
誠メテ曰ク汝忠ヲ輸シカヲ竭シ軀命ヲ惜ム勿  
レト君ノ知ル所ナリ然ルニ今奴ヲ遠クルハ奴  
ヲ以テ用フルニ足ラズト為スカト辭氣憤厲タ  
リ行重其自殺センヲ恐レテ乃チ止ム仇家ヲ  
襲フニ及ビ橋ト餅トヲ懷ニシ從ヒ其門ニ至ル  
衆義英ヲ殺シ將ニ去ラントス甚三郎迎見大ニ

ズルヲ覺  
 フ○茶ハ  
 龍鳳園ヨ  
 リ貴キハ  
 無し○品  
 葉尤高シ  
 ○宝鼎煮  
 來ル○玉  
 既滄出ス  
 ○名東吳  
 ニ種ニシ  
 ○清風雨  
 腋ニ生ズ

シ化チ開ク可キ者  
 外交ニ資ラザルナ  
 シ○諸チ十年ノ前  
 ニ比スレバ別ニ一  
 天地チ開クモノ  
 如シ○締約ノ規ア  
 リ延聘ノ禮アリ○  
 經國ノ道職チ改メ  
 懷柔ノ徳爰ニ頭ハ  
 ル○未タ信メ外國  
 ニ置クニ足ラズ○  
 弱ノ肉ハ是強ノ食  
 ナリ○一旦利害ニ

喜ビ之ニ詔テ曰ク諸君飢渴スル無キヲ得ンヤ  
 ト乃チ橋餽ヲ以テ衆ニ與フ其夜行重細川氏ノ  
 策ニ往ク甚三郎蹤跡シテ行キ其策ニ至リ蹤跡  
 之ニ久シテ迺チ去ル行重人ト語り甚三郎ノ事  
 ニ及バ嘆シテ曰ク恨ラクハ授クルニ姓氏ヲ  
 以テシテ事ヲ偕ニセザルノミト

**紀戰鬥**  
 此部門ニハ英雄豪傑戰鬪ノ事跡ニシテ  
 尤モ世ニ赫著ナルモノヲ舉ク而シテ其  
 多ク古昔ニ取ラズシテ近世ニ取ル所以  
 ハ亦是初學ノ入り易キヲ主トスルナリ

○紀犀川之役 頼山陽

○乳花烹  
 出ス○蟹  
 眼躍ル○  
 塵慮悉ク  
 散ジ○塵  
 魔忽チ散  
 ズ○半臥  
 輕ク白チ  
 浮ベ○敷  
 片淺ク黄  
 チ含ム○  
 酒後尤モ  
 佳シ○雪

臨ノバ則チ蹴起シ  
 テ忿争ス○玉帛礼  
 父ノ美或ハ變ジテ  
 干戈争奪ノ慘ト為  
 ル○外交多緒ニシ  
 テ機務錯綜ス○盈  
 チ保チ滿チ持ス○  
 弱チ併シ小チ吞ム  
 モノハ争利世界ノ  
 常勢ナリ○歌亞チ  
 席卷シ○席祖耽々  
 一方ニ割據ス○英  
 雄為スアルノ時○

八月謙信復少千騎ヲ以テ信濃ニ入ル曰ク此行  
 必ズ信玄ト親戰シ雌雄ヲ決センノミト進デ犀  
 川ヲ渡テ陣ス既望信玄二萬人ヲ以テ出テ之ニ  
 對シ壘ヲ固シテ出デズ間日謙信村上義清等ヲ  
 シテ夜兵ヲ伏セシメ而シテ曉ニ推テ采ル者ヲ  
 出シ甲斐ノ壘ニ近ヅク甲斐ノ兵出テ之ヲ追ヒ  
 伏ニ陥リ皆死ス諸隊隨テ出デ乃チ大ニ戰フ終  
 日十七合迭ニ勝敗アリ信玄潛ニ冷ヲ下シ短ヲ  
 犀川ニ張リ而シテ渡リ旗幟ヲ伏セ芦葦ノ中ヲ  
 徑リ直ニ謙信ノ麾下ヲ襲フ麾下潰走ス信玄勝  
 ニ乘ジテ進ム宇佐美定行等手兵ヲ以テ横撃シ  
 之ヲ破リ之ヲ河ニ擲ス信玄數十騎ト走ル一騎



ヲ拘シテ  
 烹ル○氣  
 味殊ニ爽  
 ナリ  
 天ノ美祿  
 ○百福ノ  
 會酒ニ非  
 ガレハ行  
 ハレバ○  
 清ナルヲ  
 標ト曰ヒ  
 ○清テ甘

アリ黃襖驪馬白布ヲ以テ面ヲ裏ニ大刀ヲ拔テ  
 來リ呼デ曰ク信玄何クニ在ルト信玄馬ヲ躍ラ  
 シ河ヲ乱リ將ニ逃レントス騎モ亦河ヲ乱ル罵  
 テ豎子此ニ在ルカト刀ヲ以テ之ヲ擊ツ信玄刀  
 ヲ拔クニ暇アラズ持ツ所ノ麾扇ヲ以テ之ヲ打  
 ク扇折ル又擊テ其肩ヲ斫ル甲斐ノ從士之ヲ救  
 ハント欲レ尺水駛シテ近ク可ラズ隊將原大隈  
 槍其騎ヲ刺ス中スズ槍ヲ擧テ之ヲ打ツ馬首ニ  
 中ル馬驚キ跳テ湍中ニ入ル信玄變ニ免ル武田  
 信繁信玄ノ危キヲ聞キ急ニ返リ騎ヲ呼ビ戰ヲ  
 索ム戰テ之ニ死ス此日兩軍死傷相當ル而シテ  
 信玄創ヲ被リ夜兵ヲ收メテ退ク後越後ノ捕虜

キヲ融ト  
 曰ヒ○濁  
 レルヲ醜  
 ト曰ヒ○  
 厚キヲ醇  
 ト曰ヒ○  
 重鹹ヲ耐  
 ト曰ヒ○  
 薄キヲ痛  
 ト曰ヒ○  
 一宿シテ  
 熟スルヲ  
 醴ト曰ヒ

ハ惜乎トシテ講セ  
 ズ○傲然自尊宇内  
 ニ雄視スルノ志ア  
 リ○揚々誇色自ラ  
 以テ計ヲ得タリト  
 為ス○禦侮自守ノ  
 說ヲ唱フ○征服膺  
 懲ノ典○修信通商  
 ノ規

○紀戰類語

軍容整肅ニシテ號  
 令嚴明○硝煙彈雨  
 ○彈丸雨注○機ニ

ヲ獲タリ言フ嚮ノ騎ハ乃チ謙信ナリト

○紀破釘柴田事 大槻磐溪

永祿十六年柴田勝家織田氏ノ為メニ長光寺城  
 ヲ守ル佐々木承禎圍テ之ヲ攻メ遂ニ其外城ヲ  
 破ル勝家退キ牙城ヲ保チ防戰甚ダカム偶々ノ  
 佐々木氏ニ告クル者アリ曰ク此城水ニ乏レ若  
 シ其汲路ヲ絶テバ城下タズ可キナリ承禎之ニ  
 從フ城中果シテ困レム而シテ未ダ其旗色ヲ變  
 セザルナリ承禎之ヲ怪シ乃チ和議ニ託シ平井  
 某ヲ城中ニ納ル勝家將ニ出テ之ニ接セントス  
 平井手ヲ盟ント請フ勝家命ジテ水ヲ巨盤ニ盛  
 リ二人ノ左右ヲシテ捧ゲテ之ヲ致サシム平井

○美者ヲ  
 應シ策ヲ決スル神  
 ノ如シ○奇ヲ出シ  
 勝ヲ制ス變化神ノ  
 如シ○善ク士卒ヲ  
 遇ス○善ク英雄ノ  
 心ヲ攬ル○頗ル部  
 下ノ歡心ヲ得ル○  
 常ニ奇計ヲ好ム○  
 操縦自在意ノ如ク  
 ナラザルナレ○一  
 縦一擒掌中ニ在ル  
 ガ如シ○操兵未ダ  
 甚ダ熱セズ○固ヨ

盟訖レバ則チ餘水ヲ庭ニ棄テ復愛惜ノ意無シ  
 平井之ヲ視テ色然トシテ飯ル既ニシテ儲水殆  
 ンド竭ク勝家脱ス可ラザルヲ度リ諸將士ヲ會  
 レテ酒ヲ置キ訣飲シ時ニ餘ス所ノ水ヲ問ヘバ  
 則チ僅ニ二斛矣勝家眉尖刀ヲ呼ビ其鐵ヲ以テ  
 水缸ヲ鏝破シ以テ必死ヲ示シ曉ニ衆門ヲ開  
 キ吶喊困ヲ潰シ以テ出ヅ佐々木ノ兵其不意ニ  
 出ルヲ以テ狼狽擾亂シ復止ム可ラズ勝家機ニ  
 乘ジテ衝突シ首ヲ斬ル一八百餘級人ヲシテ之  
 ヲ岐阜ニ獻ゼシム信長大ニ悦ビ勲狀ヲ賜ヒ以  
 テ之ヲ賞ス世ニ勝家ヲ呼デ破缸柴田ト為ス

○紀仁科信盛事 全

酒○三半  
 酒○杜康  
 ○濁醪妙  
 理アリ○  
 紅友○歡  
 伯○青州  
 從事○平  
 原督郵○  
 掃愁帚○  
 釣詩鉤醉鄉  
 疾○大寒  
 大熱此中  
 二歲ス○

仁科五郎信盛ハ勝頼ノ弟ナリ天正十年春信盛  
 高遠城ヲ守ル織田世子信忠僧某ヲシテ諭サシ  
 ノテ曰ク武田氏ノ亡ハ且夕ニ在リ宜シク城ヲ  
 致シテ忝ルベシト信盛怒リ僧ヲ捉ヘ其兩耳ヲ  
 批シ花ニ鼻ヲ剥ギ之ヲ放還ス是ニ於テ世子信  
 忠諸軍ヲ率キ進テ城ニ傳キ攻撃甚ダ急ニ殺傷  
 算ナシ信盛殘兵ヲ擁シ僅ニ牙兵ヲ保ツ小山田  
 備中春日河内渡邊金今福安諏訪莊原準人等十  
 八人逆ヘテ大廳ニ戰ヒ縱橫交擊劍光火ヲ散ズ  
 世子信忠金襴保侶衣ヲ負ヒ屏外ノ桐樹ニ倚リ  
 士卒ヲ指揮ス一女將アリ年三十餘紅縞甲ヲ着  
 ケ眉尖刀ヲ提デ呼デ曰ク身ハ是諏訪莊ノ妻ナ

満白ヲ引  
 キ○中山  
 千日ノ酔  
 ○麴生○  
 其甘キ蜜  
 ノ如シ○  
 觴政○軍  
 法ヲ以テ  
 酒ヲ行フ  
 ○平原十  
 日ノ飲○  
 一斗亦酔  
 一石亦

ニ沸ク○煩臺ノ兵  
 數十ヲ斃ス○艦ヲ  
 運ラス臂ノ指ヲ使  
 フガ如シ○船身破  
 壊ス○砲戦甚々烈  
 シク海水溢レント  
 ス○瀛艦ノ機關ヲ  
 壊リ大砲ノ火門ヲ  
 碎ク○艦洋中ニ漂  
 ヒ暗礁ニ觸レ○刀  
 ヲ揮ヒ跳テ艦中ニ  
 入ル○榴彈敵艦ノ  
 硝庫ニ中タル○群

リ來リ與ニ戦フ可シト戦ヒ七八人ヲ斃シ候ヲ  
 刺シテ死ス我將武藏守森長可屋ニ登リ板ヲ登  
 シ銃ヲ其中ニ放ツ彈丸雨下ス信盛脱セザルヲ  
 度リ床ニ據リ屠腹シ腸ヲ抽キ之ヲ裱福ニ投シ  
 テ死ス時二年十九城乃チ陥ル後ニ信盛勝ヲ投  
 ダルノ處血痕之ニ久フレテ滅セズ而シテ世子  
 信忠倚ル所ノ桐樹縱横尚刀跡ヲ存スト云フ

○紀長湫之役 全  
 長湫ノ役成瀬小吉年甫テ十七獨騎馳テ敵中ニ  
 入り首一級ヲ獲テ返リ之ヲ照公馬前ニ致ス公  
 之ヲ壯トシ且曰ク麾下ノ兵寡シ汝且留テ此ニ  
 在レ既ニシテ小吉前隊ノ辟易スルヲ見テ復馳

酔フ○晋  
 ノ周顛能  
 ク一石ヲ  
 飲ム○金  
 貂ヲ以テ  
 酒ニ換フ  
 ○釀玉兼  
 鞠部尚書  
 ○鞠生ノ  
 風味忘ル  
 可ラズ○  
 斗酒學士  
 ○黄公ノ

師ヲ馭スル甚ダ紀  
 アリ○將士ヲ撫ス  
 ル皆方略アリ○其  
 陣堂々其旗正々○  
 旌旗戈甲光彩精明  
 ○砲声万雷ノ如ク  
 山谷為ニ震フ○風  
 マ望ムテ潰散ス○  
 親ラ矢石ノ中ニ立  
 テ士卒ト勞苦ヲ同  
 フス○人々用ヲ為  
 スヲ樂シム○兵ヲ  
 用フル神ノ如ク軍

出ツ從者響ヲ援テ之ヲ止メテ曰ク君功既ニ成  
 ル乃チ死ヲ敵ニ送ルハ為ス無キノミ小吉怒テ  
 曰ク小利ヲ顧テ大義ヲ失フハ武夫ノ耻ル處今  
 日ノ戦宜シク敵ヲ破リ陣ヲ陥リ亡ヲ追ヒ北  
 ヲ逐フテ而ル後ニ止ムベシ豈一首級ヲ以テ自  
 ラ足レリトセンヤト此時ニ當テ麾下ヲ距ル  
 三十歩バカリ公呼デ曰ク止ムル勿レ前隊馬足  
 乱ル正ニ是壯士死戦ノ秋ナリト從者未ダ響ヲ  
 縦ツニ及バズ小吉直ニ馳セテ敵ニ入り大呼我  
 軍ヲ勵マシ我軍之ガ為ノニ奮躍シ勇ヲ鼓シ競  
 ヒ進ム軍遂ニ大ニ捷ツ是歳公小吉ヲ擢テ根來  
 團隊長ト爲シ大ニ其功ヲ賞シテ曰ク老将宿帥

墟 人之ヲ持シ敵人之

ヲ畏ル○其衆ヲ撫

循スル常ニ及ハザ

ルガ如シ○身ハ版

鍾ヲ操リ士卒ト切

ヲ分ツ○諸將皆懼

伏シ敢テ枝梧スル

ナシ○先スレバ則

チ人ヲ制シ後レバ

則チ人ノ制スル處

トナル○計ヲ先ニ

シテ戰ヲ後ニス○

謀定マリテ而シテ

後ニ戰フ○戰ノ術

一ナラズ要勝ヲ制

スルニ飯スルノミ

○利一決ニ在リ○

破リテ走ラス可レ

○何ゾ克タガルヲ

患ヘン○機ヲ兩陣

ニ決ス○城敗ノ機

今日ニ在リ○曉霧

忍尺ヲ辨セズ我兵

之ニ乘ジテ進ム○

火ヲ坊市ニ放ツ○

大霧ニ乘ジテ突撃

○微波影

ト雖凡過グル能ハズト蓋シ公ノ麾下成童ニシ

テ將トナリシ者ハ小吉一人ナリト云フ

○紀赤穂義士襲吉良邸事 青山延光

十二月十四日夜大石良雄同盟四十六人ト堀部

金丸ノ舎ニ會シ飲ヲ張リ夜分ニ至ル衆各同盟

備舎ノ傍近ニ在ル者ニ就キ装ヲ解キ服ヲ更ノ

良雄ニ堀部武庸ノ舎ニ會ス衆皆鎖甲ヲ褫ニシ

兜蓋ヲ戴キ韋服ヲ著ケ火ヲ救フ者ノ状ノ如ク

弓槍ヲ攢ノ擔ト長柄大槌之ニ從フ各小笛ヲ持

シ以テ號ト為シ約シテ曰ク事若成ラズンバ火

ヲ縱テ自刃セント乃チ衆ヲ分テ二ト為シ進デ

義英ノ弟ニ至リ前後大喊屋ニ榜シ門ヲ排シテ

進ミ良雄前門ヨリ入り子良金後門ヨリ入り呼

テ曰ク淺野氏ノ遺臣來リテ主仇ヲ報ズ儻ガン

ト欲スル者ハ出デト擧邸駭愕柰グニ暇アラ

ズ衆爭ヒ突入り槌ヲ奮ヒ戸ヲ破ル声竹ヲ剖ル

ガ如シ家衆多ク竄シテ出デズ寢室ニ至ル比ホ

ト義共己ニ逃ル衆手ヲ以テ林幕ヲ試ムルニ微

シク暖皆曰ク人去ル未ダ久シカラズト急ニ室

中ヲ搜ゲル者數四獲ル能ハズ兼亮等傍室ニ人

声アルヲ聞キ戸ヲ排シテ入レバ三人アリ磁器

烏炭ヲ乱擲シテ之ヲ拒グ衆前後ヨリ圍ミ逼ル

二人ハ一人ヲ翼蔽シ奮闘シテ死ス一人小刀ヲ

挺キ將ニ闘ハントス間光興槍ヲ揮ヒ之ヲ殺ス

○微波影

○微波影

動ク○輕  
ク籠ミ密  
ニ綴ル○  
經緯ノカ  
ニ由ラズ  
ンバ安テ  
卷舒ノ功  
アラン○  
珠光素月  
ヲ搖カシ  
○夏侯妓  
衣○珠ヲ  
結テ簾ヲ

ス○城外皆燒痕ニ  
属ス○城市皆兵燹  
ニ罹ル○火ヲ敷處  
ニ放テ砲撃ス○吶  
喊シテ突撃ス○狼  
狽死尸ヲ棄テ走ル  
○俗長槍大刀ヲ提  
グ○伏屍十數里ニ  
巨ル○大舉進テ城  
兵ト合ス○天下ノ  
事此一舉ニ在リ○  
天下ノ事此一戰ニ  
在ラズ期スル處遠

武林隆重ヨリ之ヲ擊殪ス衆其義典タルヲ疑  
ヒ乃チ其尸ヲ驗スレバ白襯衣ヲ着シ肩ニ刀痕  
アリ衆喜テ曰ク先君ノ手撃スル所ニ非サルヲ  
得ンヤ良雄光興ヲシテ其首ヲ斬ラシメ門者ヲ  
執ヘテ之ヲ問フニ果シテ義典ナリ乃チ号笛ヲ  
吹キ衆ヲ聚ム衆喜極ツテ哭ス

○紀蛤門之戰  
石津賢勤

十九日味爽嶺峨長兵凡ソ八百既ニ天龍寺ヲ登  
シ帷子街ニ至リ兵ヲ分ツテ三隊ト為シ一隊ハ  
中立賣門ニ向ヒ敵將國司信濃之ヲ牽ユ一隊ハ  
蛤門ニ向フ來島又兵衛兒玉小民部等之ニ將夕  
リ竝進テ關ニ薄ル時ニ會津藩兵蛤門ヲ守リ衆

為クル○  
竹簾文ヲ  
織リ水波  
ノ如シ○  
落花香裡  
東風ニ捲  
ク○翠羽  
窓中ニ動  
キ水晶戸  
外ニ浮ブ

シ○相持シテ未ダ  
戰ハズ○勢風雨ノ  
如ク復々當ル可ラ  
ズ○初ハ慶女ノ如  
ク後ハ脱兎ノ如シ  
○墨上ニ炬火ヲ點  
シ喇叭ヲ吹キ以テ  
虛勢ヲ張ル○敗ヲ  
轉シテ勝ト為ス○  
兵糧彈藥ヲ奪フ○  
刀光閃々彈丸ト相  
映ス○刀光閃キ砲  
声轟ク○皆踊躍爭

名藩兵之ヲ援ク敵ヲ萃メテ之ヲ撃チ砲撃數合  
長兵豫ノ諸紳ノ第中ニ伏ス俄カニ起リテ吾後  
ヲ襲フ會津藩背ニ敵ヲ受ケ苦戰文ヘズ先鋒久  
保田半次等之ニ死ス衆乃チ敗走ス長兵之ヲ躡  
シ突テ花洞ニ迫ル諸藩ノ守兵披靡徳カバ薩藩  
守兵急チ視テ馳至リ横ニ長兵ヲ撃ツ衆名淀諸  
隊勢ヲ得テ返リ關ヲ長兵色動ク時ニ國司ノ兵  
己ニ幕兵ヲ破リ馳テ蛤門ニ赴ケバ則チ來島又  
兵衛等方ニ酣戰ス因テ衆ヲ合セテ突進シ勢復  
振フ薩藩ノ隊長仁禮某兵ヲ縦ツテ其背ヲ襲フ  
長兵後ヲ顧ル我兵之ニ乘ジ前後夾撃ス又兵衛  
咄嗟督戰ス指麾觀ル可シ薩兵目ヲ注シテ進ミ

ヲ定メ○ 金鉄ヲ鍛テ而シテ 池ト為ス ○紫石硯 紅絲石○ 端溪良石 ヲ出ス○ 文林苑圃 二重ンゼ ラル○即 墨炭○石 卿侯○活

ト進ム○ 碁置敷十 營○營ヲ撤シテ露 次○疑兵ヲ山上ニ 張リ○旌旗鉦鼓百 餘里ニ綿亘ス○若 此機ヲ失ハハ悔ユ トモ及ブナシ威ヲ 取り覇ヲ定ムルハ 此一舉ニ在リ○期 ヲ尅レテ會戰ス○ 期ヲ尅レテ大舉ス ○日ヲ約シテ齊シ ク發ス○其未ダ陣

水源頭一 脉清シ○ 紫石潭中 ノ事○潤 澤鑑ス可 シ○天地 靈精ノ成 ス歳○雲 ヲ金リ月 ヲ抹ス○ 一拳石ノ 大○一拳 仍編々○

セザルニ及ヒ之ヲ 襲ト管ヲ安ンゼシ ムル勿レ○賊ノ氣 驕ル敗ル可キナリ ○彼進退據ヲ失フ 及ニ血ヲマレテ取 ル可シ○彼兵衆ク シテ糧足ラズ將ニ 自カラ去ル可シ○ 當ニ其動搖ニ乘ジ テ之ヲ撃ツベレ○ 展テ侵シテ進ミ攻 ム○薄食潛ニ殺ス

銃手ヲ選テ之ヲ狙撃ス其腋ニ中ツ又兵衛馬ヨ リ墮ツ姪北村金吾ヲ戒メ首ヲ到シテ國ニ送リ 敵兵ノ獲ル處ト為ル勿レト終ニ斃ル是ニ於テ 長兵大ニ沮喪ス兒王小民部等衆ヲ厲シテ死戰 スレバ丈ヲ可ラズ遂ニ敗走ス信濃等塵ニ身ヲ 以テ免カル

○紀澁橋本之戰

菊池三溪

五日黎明官軍澁ヲ攻ム賊橋ヲ隔テカノ拒ダ官 軍連リニ巨礮ヲ發シ以テ城外ノ敵ヲ挑ム敵亦 之ニ應ジ彼我礮戰相持レテ進マズ賊槍手百々 ヲ發シ之ヲ芦葦中ニ伏レ別ニ銃手ヲ出シテ戰 ヲ挑ム官軍之ヲ覺リ敢テ進マズ隊長石川厚狭

自ラ奮フテ曰ク危ヲ見テ機ヲ失フトキハ又ノ 營突ヲ如何セン乃チ銃手ヲ率牛之ニ當ル衆皆 奮フテ曰ク我兵ヲシテ敵ニ饒ハシムル母レト 先ヲ第ヒ之ニ繼グ左右伏起ル石川伊藤中島等 皆之ニ死ス隊長柳田某伊集院某等叱咤衆ヲ勵 マシ進テ敵ノ前軍ヲ衝ク敵兵辟易ス官軍鼓聲 奮撃レテ之ヲ破リ進デ澁城ヲ略ス日己ニ午ヲ 加フ敵退テ橋本ヲ扼ス是時ニ當リ津藩賊ノ為 メニ山崎ノ関門ヲ守ル天使之ニ就キ諭スニ順 逆ヲ以テス津藩命ヲ奉ジ悉ク官軍ニ飯ス而シ テ賊軍未タ之ヲ覺ラザルナリ六日官軍進ンデ 橋本ノ敵ヲ攻ム是ヨリ先キ賊澁城ヲ以テ根據

天然ノ奇  
○甚ク新  
様ヲ極ム  
象管免毫  
ノ健筆雲  
ヲ凌グ○  
免毫ニ優  
劣ナク管  
手ニ巧拙  
アリ○江  
淹夢裡ノ  
筆○筆花

○民舎ヲ燒キ陣ヲ  
布ク○居民ヲ戒シ  
ノ軍ヲ避ケレム○  
城ヲ背ニシテ陣ヲ  
為ス○歴ヲ堅フレ  
野ヲ清フシ以テ待  
ツ○諸營ヲ勅ノ皆  
部ヲ按シテ動クヲ  
得ル母ラレム○死  
セハ則チ此ニ死セ  
ン退ク者ハ斬ラン  
○三軍旗ヲ望テ進  
ム○鼓譟シテ進ム

ト為サント欲ス激藩之ヲ拒ム乃チ退テ橋本ニ  
止合ス官軍殿ニ至リ城中賊ト欺テ通ズルヲ疑  
ヒ詰責甚嚴激藩分疏具ニ其事情ヲ訴ヘ以テ他  
ナキヲ表ス官軍意解ケ即チ淀兵ヲ以テ先鋒ト  
為シ進デ橋本ヲ攻ム賊殊死シテ戦ヒ勝敗未ダ  
決セズ津兵山崎陣營ヨリ巨煩ヲ發チ横ニ賊ノ  
牙營ヲ撃ツ彈丸破裂殪ル者無數一軍崩壊シ走  
ツテ大阪ニ入ル

○紀守都宮之戰 全

初メ小山武井兩驛之戰傍近諸藩官軍ニ應スル  
者率ネ皆甲冑劍鎗ヲ用フ故ニ戦フ毎ニ利アラ  
ズ要衝ノ地往々賊ノ據ル處ト為ル是ニ至リ書

ヲ生ズ○  
一管ノ宜  
毫然テ是  
刀○管城  
子○三寸  
不律○中  
書君○毛  
錐子○尖  
頭奴○椽  
大ノ筆○  
免穎彫零  
○鷄距免  
尖○圓鋒

○行馬ニ鞭ヲ蓋地  
ニ來侵ス○重岡ノ  
中ニ陥リ健闘之ニ  
死ス○烈戰暮ニ抵  
テ止ム○常ニ銃九  
ヲ侵シテ馳騁ス○  
撒兵彈丸ヲ冒シテ  
賊壘ニ薄ル○全軍  
踊躍シテ飛ブ如ク  
瞬間ニ絶險ヲ越ユ  
○全軍色ヲ失フ○  
全軍氣ヲ統ハル○  
擯撃シテ之ヲ斃ス

ヲ飛バシ板橋及ヒ江戸ニ報ズ朝廷乃チ薩長大  
垣土州因州ノ兵ヲ遣ハシ之ヲ援フ廿二日諸藩  
ノ兵ヲ合ハシ味爽官軍守都宮城ヲ攻ム賊城ヲ  
距ル里許出テ官軍ヲ拒グ官軍之ヲ安塚ニ邀フ  
賊兵ヲ潛メテ間道ヨリ直ニ官軍ノ後ヲ襲フ彈  
丸兩注軍大ニ乱ル薩長ノ別軍雀宮ニ在ル者急  
ヲ聞キ馳至ル軍復大ニ振フ力ヲ協セ賊ヲ撃ツ  
賊兵大ニ崩ル退テ明神八幡二山ニ據ル官軍合  
撃四面齊シク進ミ銃ヲ擯メテ彈射シ硝煙天ヲ  
蔽フ兩軍晦明人色ヲ辨セズ日酉ヲ加フ賊兵堅  
ク守リ益官軍ヲ撃ツ官軍死傷指屈スルニ暇ア  
ラズ因州ノ隊長河内佐久馬憤恚シテ曰ク烏合

直管○埋  
毛鼠鬣○  
墨妙三分  
○露穎夫  
鋒○紫毫  
銀管○圖  
ヲ寓シ積  
ヲ書ス○  
稿ニ題シ  
瀟ニ書ス  
○一管四  
十年○珊  
翔ノ管○

○敵ノ病院ヲ砲撃  
ス創痍者起ツ能  
ハス○銃丸ノ道リ  
來ルモノ數ノ如シ  
○俯シテ行キ仰テ  
射ル○急ニ起テ之  
ヲ突ク疾キ一風雨  
ノ如シ○戰線數十  
里ニ跨ガル○遂ニ  
賊據ヲ拔キ哨兵ヲ  
置ク○鮮血縱横ニ  
シテ野ニ滿ツ○各  
其胸壁ニ據ル○丸

ノ流賊ヲ以テ叢再タル孤城ニ據ル衆ク我兵卒  
ヲ殺フハ是武夫ノ慚ル處何ゾ日ノ未ダ没セザ  
ルニ迄ビ斯賊ヲ殲滅シ斯城ヲ陥ラザルヤト叱  
叱衆勇ヲ鼓シテ先登ス因兵殊死肉薄城ニ登リ  
直ニ其一角ヲ拔ク是時ニ當リ全軍攻撃勢風雨  
ノ如シ賊軍辟易シ城及ビ二山ニ據ル者一時魚  
潰圍ヲ潰シテ日光ニ走ル官軍遂ニ宇都宮城ヲ  
陥ス而シテ日全ク莫矣此役傍近ノ賊賊盡ク宇  
都ノ宮ニ集リ賊勢尤モ猖獗是ヲ以テ官軍頗ル  
攻撃ニ苦シムト云フ

○紀函館之戰 全

是時ニ當テ官兵大舉水陸並進ニ四面ヨリ函館

人ハ驚ク  
大サ椽ノ  
如キニ○  
毫ヲ揮テ  
文彩妙○  
紙ニ落チ  
テ雲烟ヲ  
深ム○芒  
端寒燠ヲ  
轉ス○筆  
陣千人ノ  
軍ヲ掃フ  
○僧智永

其類ト類トヲ貫ク  
○腹背ニ敵ヲ受ケ  
兵器ヲ棄テ走ル○  
哨兵ヲ派出シ餘衆  
ヲ探偵ス○土豚壁  
ヲ築キテ連射ス○  
屍ヲ列ベ死スルモ  
ノ算ナシ○兵一千  
ヲ以テ前驅ト為シ  
○自ラ精兵五千ヲ  
率キテ之ニ繼グ○  
將士皆奮ヒ戰ハン  
ト欲ス○既ニシテ

ニ逼ル春日陽春二艦十一日昧爽ヲ以テ先ツ函  
館ノ背ニ出デ別ニ輕舸ヲ發シ陸兵ヲ寒川邑ニ  
進ノ兵ヲ山中ニ伏シ以テ敵ノ來ルヲ俟ツ既ニ  
シテ甲鐵長陽丁卯ノ三艦首尾相銜ニ以テ函館  
ノ前面ニ迫ル是日蟠龍ノ修理切ヲ竣シ賊兵之  
ヲ海ニ放チ浮臺砲墩ト相應擊シ縱横之ニ當ル  
會山中伏起リ大ニ賊兵ヲ破ル春日甲鐵諸艦蟠  
龍ト相馳逐シ殆ント將ニ蟠龍ヲ獲ントス而シ  
テ賊將松岡盤吉善ク軍艦ヲ進退シ操縱意ノ如  
ク馳騁法ノ如シ砲手永倉某ヲシテ那字烈翁砲  
ヲ發セシム榴彈飛擊長陽艦ノ硝置ニ中リ玄烟騰  
上声十里ニ震フ軍艦沈没復夕片板ヲ留メズ賊



書ヲ學ビ  
禿筆ヲ積  
ム十八癩  
之ヲ瘞ノ  
テ退筆塚  
ト号ス  
筆二三品  
アリ  
東ノ青錢  
管筆  
ヲ投ズ  
筆ヲ蓄ス

中軍鼓螺起ル  
伍々散ジテ列星  
ノ如シ  
山稜林麓  
兵ニ非ザル者ナシ  
鋒鏑方ニ接ス  
弓銃已ニ交ハル  
士卒枚ヲ銜シ馬口  
ヲ束ネテ進ム  
山  
背ヨリ枚ヲ銜シ下  
ル  
藤ヲ攀ガ葛ニ  
附キ魚貫シテ先登  
ス  
運ヲ以テ自ラ  
裏ニ推轉シテ下ル

兵掌ヲ拍チ連呼シテ曰ク快甚矣官軍輕舸ヲ飛  
バシ以テ其溺ル者ヲ濟フ是ニ由テ賊陸軍兵ヲ  
回シ大ニ官軍ヲ破ル官軍敗斂シ七里濱ニ走ル  
蟠龍追躡シ横ニ之ヲ撃ツ甲鐵春日戰急ナルヲ  
見テ直ニ蟠龍ニ薄マル左右砲撃殆ント蟠龍ヲ  
碎ク蟠龍辟易シ復テ支ユル能ハズ走テ砲臺ノ下  
ニ遁ル悉ク蒸氣機ヲ破ル大砲ヲ海中ニ投シ火  
ヲ回天蟠龍ノ二盤ニ縦チ陸ニ上リテ遁逃ス是  
ニ於テ賊兵盡ク軍盤ヲ失フ陸軍ノ官兵顧慮ス  
ル處ナク勇往直前撃テ賊軍ヲ破リ賊魁土方歳  
及ビ首虜數十人ヲ獲タリ賊軍大ニ敗レ殘兵悉  
ク走り五稜郭及ビ千代岡等ノ壘ヲ保ツ官軍遂

玄香太守  
兼亳州  
楮郡平章  
事  
墨卿  
黑松使  
者  
松滋  
陳玄  
墨俊親  
烏玉球  
墨氷一  
斗ヲ飲ム  
墨將ニ  
人ヲ磨セ

問道ヨリ其背ニ  
出テ之ヲ擣ク  
馬  
未ダ勅ヲ銜マズ  
陣未ダ列ヲ成スニ  
及ハズ  
益疑兵旗  
幟ヲ張ル  
陽ニ勝  
タザル為レテ走ル  
○洋ハリ鼓旗ヲ棄  
テ走ル  
○豫ノ左右  
ニ翼ヲ置キ伏ト為  
レ以テ之ヲ待ツ  
之ヲ擣シ之ヲ角ス  
○軍ニ見糧ナシ

○紀田原坂之戰 全  
是ヨリ先キ官軍賊ト大ニ田原坂ニ戰フ賊兵力  
メ拒ギ延テ十四日ニ至ル賊皆短兵接戦シ屢官  
軍ニ逼ル官軍之ヲ撃チ克タズ是ニ於テ官軍警  
視隊中擊劍ヲ善クスル者百人ヲ擇ビ名ケテ拔  
刀隊ト曰フ人々利刀ヲ授ケ之ヲ軍後ニ置ク是  
日大坂ノ臺兵前日ノ敗斂ヲ愧ヂ相勵ミ曰ク今  
日ノ戰尺前シテ死スル有ルモ寸退シテ生クル  
勿レト近衛兵隊ニ合シ進テ賊壘ニ薄マル賊兵  
死闘土豚ヲ隔テ之ヲ拒ク彼我接近相距ル丁僅

己身 三十二

ントス○  
池ニ臨ミ  
紙ニ落ス  
○仙家絶  
○藝○壽墨  
○墨漆○  
水麝○松  
煤○松魄  
尚餘ス香  
韻々○寒  
ク花露ヲ  
磨シテ天  
香ヲ散ス

乱刀之ヲ斬ル贈ノ  
如シ○軍士ニ三日  
ノ糧ヲ齎ラシ○鼓  
ヲ卧セ旗ヲ偃セ人  
無キ者ノ如シ○刀  
箭齊シク焚ス○晝  
伏シ夜行ク○兵鋒  
加ハル所敵入首ヲ  
授ク○我百縱横奮  
撃一百ニ當ラザル  
ナシ○兵銳ク又利  
ニ縱横揮撃人馬皆  
倒ル○辰ヨリ未ニ

ニ七八間面ト面ト相接シ銃ト銃ト交駁ヲ拂曉  
開戦シ午後四時ニ及ブ勝敗未タ決セズ彈丸雨  
注シ声山谷ニ震フ東京ノ臺兵一隊挺進シテ其  
前面ヲ攻ム賊力戦シテ之ヲ拒グ我士官悉ク斃  
ル餘兵三十人止ツテ健闘ス皆擧丸ニ中テ死ス  
死屍三十悉ク銃ヲ手ニシテ俯伏ス是ニ於テ拔  
刀隊ヲ縱チ賊ノ砲壘ヲ衝キ喇叭手一声徑ニ進撃ヲ  
報ズ刀隊呐喊進テ賊壘ニ逼ル臺兵亦銃ヲ揮テ  
之ニ繼グ賊兵三百壘ヲ弃テ走ル是時ニ當テ近  
衛兵拔刀隊ト驍名大ニ頭ハル賊中語シテ曰ク  
方今尤モ怖ル可キ者一ニ曰ク劇雨二ニ曰ク赤  
帽三ニ曰ク大砲ト蓋シ賊兵器械弊惡硝藥置乏

○石友磨  
スルニ藉  
テ糖ス○  
墨漆ヲ車  
載ス  
○紙  
蔡侯紙○  
楮國公○  
白州刺史  
○萬字軍  
略道中郎  
將ヲ領ス  
○好時候

至リ勝敗未タ決セ  
ズ○晨ヨリ接戦シ  
夜半ニ至ル○未ヨ  
リ酉ニ至ル戰數十  
合○日出ヨリ晡時  
ニ至リ敵始メテ北  
グ○軍ヲ懸ケテ深  
ク入ル○左右翼ヲ  
放チ之ヲ追フ○我  
軍ヲ下瞰シ口ヲ極  
ノテ罵詈ス○勢健  
瓦ノ如シ○瓦水ヲ  
屋ニ翻スガ如シ○

シ其雨ノ為ノニ沾濡セララル、ヲ慮ルナリ近衛  
兵皆赤帽ヲ着ス其驍勇善戦ト敵ス可ラサルヲ  
以テナリ

○紀熊本城守事 山口椒山

是時ニ當リ熊本城守五十有餘日死傷ノ者大約  
八百人而シテ援軍ノ來ル何ノ日タルヲ知ラズ  
或ハ天主閣趾ニ上リ援軍ヲ望ムニ至ラズ然レモ  
谷干城以下諸將士等意氣自若益々士卒ヲ勵シ  
捍禦ス而シテ彈藥糧食皆置シク既ニ十日ヲ支  
フルニ過キズ是ニ於テ糧食ノ數ヲ算シテ前途  
ヲ慮リ戰時四餐ノ制ヲ改メテ三餐ト為シ間々  
饋粥ヲ之ニ充ツ又文官ハ一日兩度米二勺ノ饋

言傳 卷之中

○薛濤箋  
○行波殿  
○金花殿  
○桃花紙  
○雲藍紙  
○烏絲欄  
○鴈箋  
○浣花殿  
○浮碧殿  
○紫電  
○虹  
○莫耶  
○干將  
○龍

勢朽ヲ拉グカ如シ  
○疾風ノ秋葉ヲ掃  
フガ如シ○疾風ノ  
稿ヲ振フガ如シ○  
之ヲ取ル芥ヲ拾フ  
ガ如シ○猶虎豹ノ  
自カラ陷穽中ニ投  
スルカゴトシ○孤  
軍重圍ノ中ニ在リ  
○忽チ其中堅ヲ衝  
ク○詭路其不意ニ  
出ヅ○兵ヲ促ガシ  
四面ヨリ之ヲ蹙ス

粥ヲ食フノシ而シテ一肉物ノ充ツヘキ者ナク  
或ハ砲隊ノ廢馬ヲ屠リ或ハ壕水ヲ酒シ鯉鮒ヲ  
撈リ以テ食フ既ニシテ廢馬鯉鮒亦竭ク遂ニ犬  
狸屋鼠等ヲ獲テ之ヲ食フニ至ル居ル數日宇土  
ノ地方ニ砲聲ヲ聞キ別軍ノ其地ニ入ルヲ知リ  
之ヲ蹙ツ久シ而シテ軍未ダ達セズ各將校相  
議シテ曰ク今ノ急ハ兵員ヲ減シ以テ糧食ノ欠ヲ  
補フニ在リ均シク死スル寧ク圍ヲ衝キ以テ出  
ント是ニ於テ少佐奧保鞏一大隊ヲ收メ八日曉  
霧ニ乘ジテ城ヲ出デ直チニ安己橋ニ至リ敵ノ  
哨兵ヲ卻ゾク城中又別ニ一大隊ヲ出シテ尾擊  
ニ備フ奧少佐疾驅シ水若村ニ至ル別軍之ニ繼

泉○太阿  
○工市  
純鈞○港  
○魚腸  
○巨關  
○水陸  
○馬牛  
○斬水  
○鴻丁  
○擊ツ  
○敵  
○二當ル時  
○八甲盾ヲ

○濡水ノ衾褥ヲ積  
累シ以テ胸壁ニ當  
ツ○濡衣衾ヲ樹ニ  
懸ケ以テ彈丸ヲ防  
グ○邑人兵變ニ懼  
リテ遠ク避去ル○  
城楯上時ニ短歌ノ  
声アリ○門ヲ開イ  
テ衝突ス○遂ニ流  
彈ニ中テ殪ル○胸  
壁ヲ貫キ大砲ヲ碎  
ク○敵兵ヲ聚メ七  
吃之ヲ督ス○肉飛

キ九品寺ニ至ル時ニ坂田諸潔地方ノ兵ヲ率ユ  
其安己橋ノ哨兵走ルヲ聞キ咄嗟馳セ來ル流彈  
下チ其脚ニ中リ進ムヲ得不賊ノ諸隊之ヲ聞キ  
遽ニ兵ヲ集メ奧ノ兵ヲ尾擊ス別軍ノ官兵之ヲ  
支フ賊ノ諸隊後顧進ム能ハズ奧ノ兵間ヲ得テ  
中牟田村ヨリ御船街道ニ出テ緑川ヲ渡リ隈庄  
ニ至リ櫻山ニ沿テ遂ニ宇土ノ軍ニ達ス此時別  
軍猶後備ヲ嚴ニシテ奧ノ兵既ニ遠キヲ圖リ兵  
ヲ收メテ城ニ入ル此日黒田參軍高島少將佐藤  
少佐等水原山ニ登リ地理ヲ相ル適一軍ノ塵ヲ  
颺テ來ルヲ望ミ急ニ兵ヲ出シ準備ヲ為ス兵  
兵還リ報ジテ曰ク奧少佐一大隊ヲ率キ城ヲ出

已傳 卷之中 傳門 三十四

斬ル○天  
下ノ名器  
○長劍天  
外ニ倚ル  
○精光斗  
牛ヲ射ル  
○水ニ蛟  
龍ヲ斬リ  
陸ニ犀革  
ヲ刺ル○  
寒光凛々  
○龍藻龜  
文○雲ヲ

トシテ荒野ト為ル  
○勢常山ノ蛇ノ如ク  
首尾相救フ○譬  
ハ破竹ノ如ク數  
節ノ後ハ又ヲ向ヘ  
テ解ク○譬ハ韓  
盧ヲ走ラシテ蹇光  
ヲ搏ツガ如シ○此  
之猿臂ノ勢ト謂フ  
○日暮ニ會シ兩軍  
交戦ス○敵ノ馬足  
乱ル追フ可シ○疾  
雷耳ヲ掩フニ及バズ

テ來ルナリト諸將喜禁セズ之ヲ本營ニ迎ヘテ  
相慰籍ス因テ地方ノ敵稍弛ムヲ知ル此時賊軍  
大半其地方ヲ去リ寡少ノ偽兵ヲ置クノ故ニ  
城兵無人ノ地ヲ行クガ如ク事意表ニ出ツルト  
イフ

扶クリ光  
ヲ現ス○  
什襲珍藏  
○龍ニ化  
シテ延津  
ノ水ニ入  
ル○元是  
銀鋳ノ漢  
ヨリ出ツ  
○紫氣夜  
星ヲ干ス  
○光芒三  
尺○霜ヲ

ニ上ル○地形險要  
ヲ占ノ守リ易ク攻  
ノ難シ○城ヲ出ル  
里許土豚ヲ以テ砲  
礮ヲ築キ関ヲ設ケ  
テ拒戦ス○城市村  
落皆兵燹ニ罹リ蕩

姓名ヲ記セザル者ハ傳フルニ由ナケレバナリ  
烈幼女ノ事今ニ及ビ記セザレバ余恐ル數十年  
ノ後又或ハ其姓名ヲ逸セン故ニ之ガ傳ヲ作ル  
女名ハ富家ハ内久空寺街ニ在リ又ノ屋ヲ僦リ  
紙ヲ鬻クヲ以テ業ト為ス父早ク歿ス遺孤四ア  
リ女ハ其第二子ナリ一夜賊數人突入シ擧家皆  
道ル獨女ト長兄仁三郎及ビ弟吉藏ト在リ賊又  
ヲ挾テ兄ヲ劫シ財ノ在ル處ヲ問フ時ニ女甫メ  
テ十歳身ヲ以テ弟ヲ蔽ヒ蓄フル所ノ星金ヲ出  
シテ兄ヲ贖ハンテ乞フ賊怒リ刀背ヲ以テ女ヲ  
連撃ス女身ヲ刀下ニ委シテ曰ク児ヲ殺シテ兄  
ヲ救ヘ兄無ケレバ家ヲ如何セント辞氣悽惋賊

此部門ニハ偉人傑士ノ紀傳ニ係レル文  
ヲ列叙スル諸例ハ皆前ニ同じ  
○列幼女阿富傳 森田節齋  
浪華ノ市戸十萬ニ下ダラズ而シテ其間幼童旌  
賞ノ者向ニ義童アリ頃口烈幼女アリ義童ハ身  
ヲ以テ主ニ殉フ今ヲ距ル遠カラズ而シテ人其

傳門

帶アル秋  
 水○尚方  
 斬馬ノ劍  
 ○夜々長  
 虹斗牛ノ  
 問ヲ貫ク  
 ○劍ハ一  
 人ノ敵○  
 魑魅心驚  
 キ洞龍魄  
 視ハル○  
 鈍ハ寒シ  
 烈士ノ手

進退據ヲ失ヒ自ラ  
 踏籍ス○相蹂躪シ  
 多ク死ス○崖ニ投  
 ジ水ニ赴キ死スル  
 者甚ダ多シ○自ラ  
 河ニ投ジ死スル者  
 數千○僵屍相属ス  
 ○死スル者野ヲ蔽  
 ヒ川ヲ塞グ○人馬  
 相擠壓ス○水之ガ  
 為ノニ流レス○山  
 之ガ為ノニ緒シ○  
 流血川ヲ為ス○僵

相顧テ感嘆引去ル後賊捕ヘラレ自訟ス市尹女  
 及ビ兄ヲ召シ親シク其状ヲ問ヒ大ニ之ヲ賞シ  
 状ヲ具シテ大府ニ以聞ス大府銀十錠ヲ賜ヒ之  
 ヲ旌ハス實ニ嘉永九年七月十九日也賊ニ遇フ  
 ノ日ヲ距ル百有餘日森田子曰ク烈幼女ノ事傳  
 聞異同多シ余人ヲシテ親シク其家ニ聽カシメ  
 之ヲ記ス此ノ如シ義童ニ至テハ則チ余將ニ搜  
 索シテ他日ニ傳ヘントス

○女丈夫傳  
 古賀侗庵

女丈夫ハ女子阿婉ナリ其行事卓落古烈丈夫ニ  
 愧ル無キヲ以テ故ニ今此ヲ以テ稱ス阿婉ノ父  
 某嘗テ羽ノ米澤ニ仕フ既ニシテ故アリテ禄ヲ

鋒ハ利シ  
 倭臣ノ頭  
 ○百鍊千  
 磨○蛟螭  
 泣キ鬼魅  
 愁フ○曾  
 テ宿將ノ  
 手ヲ經ル  
 扇  
 舞五明扇  
 ナ作クル  
 ○班姬ノ  
 團扇○白

尸野ヲ蔽フ○狸ニ  
 身ヲイテ免ル○提  
 身シテ走ル○塵ヲ  
 望テ退ク○之ヲ望  
 シ氣ヲ奪ハル○智  
 者アリト雖モ其後  
 ナ善クスル能ハズ  
 ○吾レ其能ク為ル  
 ナキヲ知ルナリ○  
 事會ノ來ル其間髪  
 ナ容レズ○賊己ニ  
 掌握ニ入ル○先之  
 ヲ破リ而シテ後ヲ

辭シ退テ都下新川ノ上ニ居リ醫ヲ以テ鳴ル治  
 ヲ求ムル者絶エズ列族或ハ給スルニ月俸ヲ以  
 テス阿婉夙ニ母ヲ喪ヒ一妹ト父ニ從フテ居ル  
 一夕夜半ニ父アリ門ヲ叩キテ其家人ノ病勢酷  
 危甚シキヲ告グ父表ヲ趣ガシ趨リテ之ト俱ニ  
 往ク獨ニ女居守ス時ニ列族餉クル處ノ月俸偶  
 積テ堂ニ在リ隣近惡少主人ノ亡キヲ時トシ又  
 二女ノ能ク為スヲナキヲ蔑リ四人群ヲ成シ時  
 ナ排シテ入り更ニ米苞ヲ擔ヒ以テ出ヅ阿婉時  
 二年甫十六而妹僅ニ八九歳阿婉妹ニ語り曰ク  
 吾儂弱ノ一女子ト雖モ坐シテ賊ノ吾室ニ入り  
 吾粟ヲ奪フヲ視テ玩スル能ハザレバ他日胡ノ

傳門  
 三十六

羽扇○蒲  
葵扇○七  
輪扇○合  
觀扇○齊  
統素ヲ裂  
キ之ヲ敷  
ス○筠ヲ  
裁シ務ニ  
比シ○素  
ヲ裂キ蟬  
ヨリ輕シ  
○片月内  
ニ掩ヒ○

ニ食センノレ○此  
ヲ滅シテ朝食セン  
若シ大軍一振セバ  
勢必不戈ヲ投ゼン  
○虜ハ吾ガ目中ニ  
在リ○無メノ地ヲ  
行クガ如シ○糧ニ  
敵ニ因ル○餘糧尙  
ニ棲ム人匱乏ノ憂  
ナシ○到ル處皆及  
ニ血ヲズシテ下ル  
○高槽ヲ為リ土山  
ヲ起シ地道ヲ為リ

顔アツテ人ニ見ニヤ且也阿爺剛嚴ヲ以テ聞エ  
吾賊ヲ見テ退縮シ手ヲ出ス能ハサレバ譴罰必  
ラズ小ナラズ吾將ニ身ヲ挺シテ之ニ當ラント  
スト乃チ潛ニ妹ヲ度湖中ニ匿シ少シク其戸ヲ  
開キ其外ヲ瞰ハシメ謂テ曰ク吾一婦人織蓐力  
ナシ之ニ加フルニ寡ヲ以テ衆ニ敵ス萬生理ナ  
シ吾死スルノ後阿爺家ニ還レバ汝具ニ見ル處  
ヲ陳シテ可ナリ吾ノ汝ニ囑スル處ハ獨此而已  
便チ刀ヲ提ゲテ潛ニ側戸ヨリ出テ玄關ノ外ニ  
伏ス一賊アリ正ニ米ヲ負フテ出ヅ直ニ進ミ刀  
ヲ其腹ニ刺ス立口ニ斃ル一賊アリ後ニ當ル其  
跌テ僵ルト謂ヒ趨リ將ニ之ヲ救ハントス又

重規外ニ  
圓ナリ○  
清瀧水ニ  
逝ハ○堂  
寒泉ニ等  
シ○仁風  
ヲ奉揚ス  
○桃枝扇  
○緑沈色  
○紫組色  
○白綺扇  
○夏ハ搗  
ク比翼扇

テ之ヲ攻ム○雲梯  
地突百道皆進ム○  
城中應セズ人ナキ  
ガ如シ○飛梯ヲ作  
リ城ニ臨ム○卒ヲ  
一面ニ伏セ三面墜  
ヲ填ノ踏踏シテ登  
ル○城後ヨリ檢ヲ  
冒シテ入ル○故ニ  
岡ノ一角ヲ闕キ其  
衆ニ犇飯ヲ得セシ  
ム○城兵ノ俸且息  
ムヲ窺ヒ則チ復進

之ヲ刺ス亦斃ル是ニ於テ一賊ハ暗中ニ人アル  
ヲ覺リ來テ將ニ前ニ己ヲ捕ヘントス阿婉刀ヲ  
揮ヒ之ヲ擊チ其一臂ヲ断ツ書然地ニ墮ツ其一  
ハ逃走ス追擊之ヲ傷ク之ニ少クシテ父方ニ歸  
リ之ヲ聞テ大ニ驚ク事聞ス町奉行其義勇ヲ奇  
トシ賞スルニ銀錠ヲ以テシ且痛ク死傷者ノ家  
ニ禁シ仇怨スルヲ得ザラシム實ニ享保季年  
ノ事也阿婉盜ヲ斫ルノ刀ハ蓋シ左文字其父米  
澤ニ在ル時君之ヲ賜フ者ナリ胡操子曰ク余毎  
ニ輓近世教化具ハルナキヲ病フ而シテ閨壺ヲ  
甚シトス乃チ阿婉ノ壯烈英偉ノ若キ亦以テ懦  
ヲ立テ愚ヲ破ス可シ寧ゾ民シテ傳フル無キニ

記傳 文伍 卷之四

傳門

○祭爛明  
月ノ光ア  
リ○常ニ  
秋風ノ至  
ルヲ恐ル  
○太恐ル  
恩情ノ中  
道ニ絶ヘ  
ン一ヲ○  
思寵長カ  
ラズ忽チ  
秋風ノ吹  
クヲ見ル

ム○利ナレバ則チ  
出テ攻メ利ナラザ  
レバ則チ入テ守ル  
○懈レバ則チ之ヲ  
撃チ退ケバ則チ躡  
ス○前後敵ヲ防キ  
曠日弥久○敵兵四  
面仰攻ム呼ブ声天  
地ヲ動ス○大石巨  
材ヲ投ジ撃テ之ヲ  
卻ク○左右ヲ率キ  
牙城ニ登リ拒戦フ  
○肉薄城ニ登ル○

忍ビンヤ明季阮太冲將士ノ屢擣流賊ヲ制スル  
能ハサルヲ憤ホリ古女子婦人ノ義旗ヲ建テ盜  
賊ヲ滅ス一ヲ雜取レ女雲臺ニ卷ヲ著ハシ以テ  
時ヲ諷ス余是傳ニ於テモ亦猶太冲ノ志ノ如キ  
ナリ但彼ハ則チ專ラ鬚眉男子ヲ勵マス是小不  
同タルノミ

○本田氏二女傳 藤田九萬

本田氏ノ二女長ヲ芳ト曰ヒ少ヲ熊ト曰フ長州  
北浦島ノ人父ノ名ヲ逸ス兄席之助ハ奇兵隊士  
タリ丙寅七月長兵豊前ニ入ル席之助小倉ノ兵  
ト赤阪ニ戦ヒ之ニ死ス芳年二十一熊年十九深  
ク兄ノ死ヲ傷ミ誓フテ仇ヲ復セント欲シ共ニ

○涼颯昨  
夜至リ思  
龐今日廢  
ル

燈

一點ノ蘭  
膏○長祭  
數尺○金  
連紅ヲ吐  
キ玉草翠  
チ焼ク○

勝ニ乘ジテ其子城  
ヲ攻ム○伏ヲシテ  
勞ヲ待ツ○死者城  
ト平カ○弓折矢盡  
ク○城ト相存亡ス  
○濠之ガ為ノニ平  
カ○積屍城ト等シ  
○積甲山ト等シ○  
城中人相食ム○城  
中屍ヲ負フテ汲ム  
○城兵尾撃シ敵軍  
死スル者多シ○推  
米路絶ユ○汲路全

戰隊ニ入ラント請フ隊將許サズ固ク請フ乃チ  
之ヲ輜重ニ属セシム皆白衣袴ヲ着ケ長劍ヲ帶  
ビ眉尖ヲ杖ニシテ行間ニ出入ス八月二十三日  
姉妹豊後橋ヲ過グ小倉ノ兵四十人許俄ニ至ル  
二女ヲ望ミ見テ之ヲ銃射ス二女刀ヲ横ヘ声ヲ  
勵マレテ曰ク若ハ丈夫ニ非ズヤ婦女子ト闘フ  
ニ何ゾ火器ヲ用フルヤ劍ヲ執リ來リテ共ニ死ヲ決  
ス可シト敵怒リ將ニ進ンデ之ニ迫ラントス會  
我斥兵來リ横ニ撃テ之ヲ走ラシ四ノ人ヲ斬リ八  
人ヲ獲タリ二女奮フテ曰ク願クハ親ラ此八ノ  
ノ頭ヲ斬リ以テ兄ノ仇ヲ報セント劍ヲ抜キ三  
タビ躍ツテ盡ク之ヲ斬ル是ニ於テ隊將二女ヲ

ク照ス○  
洞房ノ春  
灼々光搖  
キ○宮邨  
ノ夜煌々  
色晃ク○  
長々烟浮  
射ル○織  
影下チ歎  
キ冷花時  
ニ結フ○  
點々花チ

ク絶ス○竟ニ一人  
ノ降ル者ナレ○蒙  
權關艦水陸并下ル  
○舟并行ク鳥ノ翼  
ヲ張リテ上ルガ如  
シ○大小戰艦尾ヲ  
銜ムテ進ム○潮ニ  
乗ジテ上ル軸轆尾  
ヲ銜ム○舟ヲ聯ネ  
テ方陣ヲ為ス○水  
路鎖ヲ聯ヌル數十  
里○豫ノ土脈ヲ作  
リ湖水ヲ遏斷ス○

激賞レ且之ニ喻シテ曰ク汝ノ兄ニ報スル所以  
ノ者亦至矣顧フニ汝ハ老母アリ汝ヲ待テ食ヲ  
嘗ヲ汝ニシテ死セバ將ニ老母ノ誰ニ依ラント  
スルヤト言未ダ畢ラズニ女泣然淚下ル即日恩  
ヲ謝シテ家ニ歸ル野史氏曰ク語ニ云ク精誠ノ  
至ル所以テ金石ヲ貫クベシト信ナルカナニ女  
ノ能ク乱丸ノ下ニ奮フテ纖手能ク八人ノ頭ヲ  
斬ル所以ノモノハ獨其膽ノ大ナルニ非ズ其孝  
弟篤摯ノ天ニ出デ精神一往シテ過ム可ラザル  
ナリ世ノ鬚髻アル者其膽皆婦人ヨリ小ニ戰ニ  
臨ミ往々ニ女ニ愧ル者アルハ何ゾヤ傳ニ曰ク  
戰陣ニ勇ナキハ孝ニ非ザルナリト吾今ニシテ

結ビ依々  
影ヲ美ス  
○芙蓉帳  
外翳翠簾  
前○華燭  
滿堂晝ヲ  
欺ク○列  
星ノ盈々  
タルガ如  
シ○影ハ  
窓ニ移ル  
ノ月ヲ奪  
ヒ○新涼

水淺ク渡ル可キナ  
リ○乃チ流ヲ乱シ  
テ皆濟ル○河水ニ  
因リ軍勢ヲ乱ル以  
テ之ヲ襲フ○水ヲ  
決シ之ニ灌ケバ百  
萬ノ衆魚ト為ラシ  
ムベシ○矢ノ舟板  
ニ着クテ急雨ノ如  
シ○舟中ノ指搦ス  
可シ○横尸枕藉シ  
水為メニ填咽シテ  
流レズ○水之ガ為

後孝子ノ陣ニ臨ミ必ス勇ナルヲ知ルナリ  
○阿長傳 頼 支峰  
阿長ハ丹波小林邑ノ木匠某ノ妻ナリニ女アリ  
皆幼シ嘗テ江戸大災アリ某土木ノ利ヲ獲シ  
テ思ヒ江戸ニ往キ更ニ妻ヲ娶ル遂ニ江戸ニ住  
ミ音信ヲ通セズ然ルニ阿長操ヲ守リ能クニ女  
ヲ養フ人ノ為メニ縫裁澣濯以テ活ヲ為ス母子  
乾々トノ貧窶骨ニ逼ル庭ニ一ノ櫻樹アリ謂フ  
是吾夫ノ手植ナリ猶其夫ヲ視ルゴトシト日ニ  
其樹ニ培溉スル殆ンド二十年樹益茂リニ女皆  
嫁ス既ニシテ阿長病シテ歿ス實ニ元文三年四  
月ナリ幾モナク樹亦枯ル人之ヲ稱シテ標櫻ト



郊墟ニ入  
リ燈火稍  
親レム可  
シ○燭一  
寸ヲ刺シ  
テ詩ヲ賦  
ス○碎ト  
シテ雲停  
ルガ如ク  
爛トシテ  
星布クカ  
若シ○紅  
蕊ノ晨舒

曰フ邑人長谷川士常阿長ノ状ヲ携ヘ來リテ曰  
ク標櫻根株今猶存ス邑人根朽チ名亡ン丁ヲ恐  
レ子ニ請ヒ之ヲ記シテ邑人ニ警戒スル所ヲ知  
ラシメント頼復曰ク阿長貞婦ト謂フ可キナリ  
二十年ノ久シキ獨其二女ト櫻樹トヲ養ヒ毅然  
其標ヲ變ズ豈極養アリテ然ルカ然ルニ一貧匹  
婦必ズ婦教ヲ聞クニ暇アラズ蓋其自操天性ニ  
出ルナリ余古來忠臣節婦ノ遇不遇ヲ以テ其志  
ヲ變ゼザルヲ觀ルニ阿長亦愧ヂズ世ノ遠役及  
ビ客商數年還ラザレバ則チ其妻徃々其生ム處  
ノ子ヲ棄テ奔テ私人ニ依ル阿長ヲシテ知ルア  
ラシムレバ則チ必ラズ地下ニ怒罵セントス余

ヲ競ヒ丹  
螢ノ昏禁  
ヲ蔑ニス  
○華繁疑  
鳩  
秦鏡心胆  
ヲ照ス○  
仁壽殿前  
ノ大鏡人  
ノ形體ヲ  
寫ス○石  
鏡ノ色白

ラントス○頗ニ火  
箭ヲ放チ毒烟城ヲ  
蔽フ○火ヲ縱ツテ  
呼噪シ烟燄天ニ漲  
ル○光數十里ヲ照  
ス○赤光相映シテ  
火電ノ如シ○炬火  
ヲ基置シテ疑兵ヲ  
為ス○萬炬俱ニ發  
ス○火ヲ縱チ自ラ  
救フ○忽チ樓上火  
起ル○其雲梯ヲ奪  
ヒ之ヲ焚ク○乃チ

聞ク南朝ノ亡フルヤ其忠臣義僕多ク小林邑ニ  
窟匿スルト噫嘻阿長モ亦其後裔カ  
○猪神童桃郎傳記 長野豊山  
猪氏ノ子奇オアリ良堅ト名ク其奇ヲ以テナリ  
人復之ヲ童視セズシテ冠者ニ比ス因テ字ヲ子  
駿ト云フ初子駿生テ三歳更ニ能ク周興嗣ノ千  
字文朱子章句ノ大學ヲ誦ズ即チ他ノ兒ニ在テ  
ハ方ニ孩笑ヲ之レ辨ズベシ而シテ子駿啾啾ノ  
聲宛轉愛スベシ一坐傾聽シ驚愕嘆異セザルナ  
シ六歳詩ヲ能クシ八歳文ヲ能クシ四子五經ヨ  
リ左氏國策遷固ノ史及ビ諸子百家ノ言默識心  
ニ在リ誦讀流ル、如シ觀者詫シ以テ奇ト為ス

キ月ノ如ク面ヲ照ス雪ノ如ク之ヲ月鏡ト稱ス  
 ○望蟾ノ鏡○菱花鏡○波無  
 キニ菱自カラ動キ夜ナラザル二月恒ニ明ナリ

風ニ順ヒ火ヲ縱チ前後鼓譟ス○火ヲ舉ゲ内外夾ミ擊ツ  
 ○風怒リ火盛ニ橋樓崩焼ス○火光山谷ニ徧滿ス○火器俱ニ発シ霹靂地ニ震フ○大雨ニ値フ  
 火藥弓矢皆濕フ○夜多ク火ヲ燃シ疑兵ヲ為シテ還ル○飛九アリ其胸ニ中リ背後ニ出ツ○振

子駿乃チ曰ク我能クスル所ノモノ人ノ能クスル處ヲ能クスルノミ能ク鬼神ヲ驅逐シ風雨ヲ使役スルニ非ルナリ惡ンゾ其奇ト為スニ在ラニヤト豊山子之ヲ聞キ笑テ曰ク夫レ將ニ奇ナラザルヨリシテ之ヲ視レバ則チ奇ナルヲ以テ奇トナス奇ヨリシテ之ヲ視レバ則チ奇ナラザルヲ以テ奇ト為ス宜ナル哉子駿ノ自カラ其奇ヲ知ラザルヤ然レバ則チ世ノ白首策ヲ挾ミ虚名ヲ妄竊シ其實ハ噴々黑白ヲ辨スル能ハザル者子駿指シテ以テ奇ト為スカ子駿今年十歳既ニ桃郎傳ヲ著ス文粲然トシテ斯ニ奇ナリ此ヨリ以往猶能ク其才ヲ養ヒ其學ヲ殖セズ則チ愈

水心鏡○龍匣外ニ魚レ風花中ニ倚ル  
 ○鷺鳥影ヲ見テ鳴ク○異光彩ヲ流ス  
 ○曠世ノ精室○日ニ晞カシ水ニ映ズレバ清朗

旅凱旋ス○凱旋功ヲ奏ス○凱歌ヲ奏シテ旋ル○錦旗ノ日

人ト為リ剛直ニシテ阿ラズ○忠孝節義ノ事ヲ聞クヲ喜ブ○氣節ヲ尚ビ朴素ヲ重ンズ○自主獨行○獨立特行ノ士○自ラ天性ニ得ル所アリ○義ヲ重

出テ愈奇鬼神出没風雨變幻ノ奇他日余其文ニ於テ之ヲ見シ而シテ余ハ則チ碌々奇ナル能ハザル者然ルニ子駿誤テ余ヲ篤信ス故ニ之ガ為メニ一言其奇ヲ説カザルヲ得ザルナリ

○佐々木照元傳 蒲生聚亭

照元字由也佐々木志津テノ女ナリ高倉家臣粟津信濃之介ニ嫁ス伉儷甚ダ篤ク家事ニ拮据スル二十餘年未ダ嘗テ過失アラズ會信濃病ニ家道窮シ疾亦危篤ナリ一日信濃泣テ照元ニ謂テ曰ク我死セバ則チ卿獨家ヲ支フル能ハザルヘシ尼ト為リ江湖ニ零落スルハ我塊魄安カラザルナリ吾衰畢レバ卿宜シク更ニ良ヲ擇ビテ

明堂○山  
雞見テ獨  
舞ヒ海鳥  
望デ孤鳴  
ス  
香  
白檀香○  
返魂香○  
雞舌香○  
沈香○返  
生香○聞  
思香○金  
顏香○寫

釋香○一  
水四香○  
伴月香○  
麝香○換  
檀香○篩  
○金炉一  
炷ノ香○  
院落畫靜  
ニシテ最  
々烟麝ル  
○炷香一  
線○博山  
薰霧結

ンジ勇ナ尚ブ○學  
博ク行修マル○胸  
襟洒落○磊々落落々  
○光風霽月ノ如シ  
○苟クモ相合フヲ  
米ノス○貧ニシテ  
善ク守ル○煙ク天  
性ニ得ル所ヲ發ス  
○義ヲ重ンジ財ヲ  
輕ンズ○自ラ奉ズ  
ル儉朴ナリ○風節  
ヲ勵マレ行義ヲ慎  
ム○清苦自カラク

ツ○其郷ニ隱徳ア  
ル益シ一日ニ非ザ  
ルナリ○常ニ財ヲ  
吝マズ以テ郷人ヲ  
濟フ○邑人ノ之ヲ仰  
ク父母ノ如ク之ヲ  
敬スル鬼神ノ如シ  
○剛毅卓犖俗ニ隨  
ハズ○忠孝節義ノ  
事ヲ聞ク毎ニ淚涕  
々トシテ下ル○流  
俗ニ溺レバ汚世ニ  
染ラズ○羈スルニ

平山二兵衛傳

全

一藝ヲ善クスレバ則チ類類人ニ驕リ甚タシキ  
ハ則チ其夫ヲ蔑視ス照元ノ夫ニ事フル如キ其  
死ニ臨ムニ至始テ己ノ善書ヲ説ク何ゾ其慎ノ  
ルヤ謙遜自淑婦女子ノ標準ト謂フ可キ矣夫  
○平山二兵衛傳  
平山二兵衛ハ新治縣富谷村ノ戸長ナリ資望ア  
リ性仁慈夙ニ濟物ニ志ス北総ノ土俗墮胎洗子  
ノ弊アリ二兵衛深ク之ヲ憂ヘ貧民ノ生見育シ  
難キ者有レバ輒チ請フテ之ヲ育シ數十金ヲ費  
シテ吝マズ民部省嘗テ之ヲ賞シ金二百圓ヲ賜  
フ二兵衛乃チ一策ヲ畫レ賜金ヲ以テ資本ト為  
シ馬數十頭ヲ買ヒ貧民ニ貸シ年ニ薄息ヲ收メ

沈水炷絲  
長シ〇烟  
氣衰々直  
チニ上リ  
〇蓄穢一  
滴ノ香〇  
青烟細ク  
吐出シ〇  
氤氳ノ氣  
一室ニ滿  
チ〇馥郁  
ノ香滿堂  
ニ薰ス〇

爵祿ヲ以テス可ラ  
不誇クニ利欲ヲ以  
テス可ラズ〇以テ  
時好ニ投シ以テ聲  
譽ヲヤス〇常ニ貧  
賤自ラ安ンズ〇家  
ニ儉石ノ儲ナシ〇  
貧ニ居テ自如タリ  
〇夙ニ大志アリ〇  
將ニ大ニ為ス所ア  
ラント欲ス〇大事  
ニ遇フ毎ニ死ヲ以  
テ自ラ誓フ〇天資

益馬ヲ買ヒ今ハ三百五十餘頭ニ至ル辛未  
物價騰貴シ庶民生活ニ苦シム一夕婦人ノ二三  
歳ノ児ヲ道路ニ棄ルアリ適ニ兵衛之ヲ見テ諭  
スニ天倫ヲ以テシ且金若干ヲ與フ非又穢人ヲ  
廢スルノ令出ルニ道ビ富谷村穢人二十餘人村  
中ニ編籍ス閭村皆忌避シテ齒セズニ兵衛慨然  
請フテ己カ附籍ト為シ皆之ニ産業ヲ授ケ向ニ  
育スル所ノ兒子ヲ俵セテ六百餘口ニ盈ツ而テ  
親昵骨肉ノ如シト云フ縣官具狀シ以聞ス朝廷  
銀盃一個ヲ賜ヒ以テ之ヲ賞ス蓋シ明治六年二  
月某日ナリ善諷子曰ク吾居恒好テ史遷ノ遊使  
貨殖ニ傳ヲ讀ミ私史ヲ修スルニ及ビ其人ニ乏

蓬山一縷  
ノ雲  
博山香炉  
〇麝火珠  
ヲ埋ノ〇  
蘭烟黒ヲ  
毀ツ〇芳  
ヲ含ミ霧  
ヲ吐ク〇  
烟ニ非ズ  
雲ニ非ズ  
〇時ニ濃

豪邁 節ヲ折リ書  
ヲ讀ミ日夜淬勵ス  
〇手ニ卷ヲ釋カズ  
〇志ヲ勵マシ古ヲ  
慕フ〇翻然志ヲ變  
ジテ意ヲ仕途ニ絶  
ツ〇博ク經史ニ涉  
ル〇圖ヲ左ニシ書  
ヲ右ニシ講學自ラ  
修ム〇祈寒酷暑ニ  
モ未タ曾テ廢セズ  
〇流離困踣備サニ  
艱楚ヲ嘗ム〇清涼

シキヲ恨ム今ニ兵衛ノ事ヲ觀ルニ事甚簡未タ  
其人ト為リヲ詳ニスル能ハズト雖其俠骨貨  
殖亦己ニ多トスルニ足ル者アリ是ニ於テカ之  
ガ傳ヲ立ツ  
〇笠原長順傳  
笠原長順ハ本多族ノ侍醫ナリ學識アリ秩千石  
ヲ食ス其子順庵ヲシテ京師ニ遊學セシメテ  
ルニ臨ミ學資金五圓ヲ與フ親戚其甚ダ鮮キヲ  
憫ミ潛ニ金若干ヲ贖ス順庵京師ニ學ブ三年ニ  
シテ飯ル長順謁スルヲ許サズ先ツ運氣論ノ  
疑義二三条ヲ出シ之ヲ解セシメ障ヲ隔テ聽キ  
輒チ曰ク醫學未ダ熟セザルナリ汝何為ソ飯ル

時ニ淡  
 作チ聚リ  
 還分ル  
 火微ニ盡  
 難ク風長  
 ク聞ヘ易  
 シノ鵲尾  
 ノ香炉  
 芙蓉艦  
 沙棠舟  
 孝廉船  
 凌風舸

剛勇天性ニ出ヅ  
 資性活潑能ク人ノ  
 為シ難キ所ノ事ヲ  
 為ス  
 日夜旣々難  
 日モ足ラザル者ノ  
 如シ  
 慷慨國ヲ憂  
 悲壯死ヲ誓フ  
 硃ヲトシテ業ヲ修  
 マ手ニ卷ヲ廢セズ  
 才氣銳利當ル可  
 ラズ  
 時トシテ精  
 神ヲ拔ニ存セザル  
 ナク往クトシテ心

ヤ乃チ又金五圓ヲ與ヘテ更ニ出デシム頃庵復  
 京師ニ至リ苦學三年過チ飯ル長順又之ヲ試ム  
 ル初ノ如シ順庵答辨流ルガ如ク素問難經ヨリ  
 以テ傷寒金匱ニ至ルマデ一モ解セザル者ナシ  
 長順乃チ大ニ悦ビ報然トシテ障ヲ開キ曰ク順  
 庵汝ハ真ニ我兒ナリ我久シク汝ヲ見ズ汝今醫  
 學成矣我汝ノ飯ルヲ待ツヤ久矣乃チ新裁ノ衣  
 服一置拜ニ金五百圓ヲ出シ以テ之ヲ與ヘ既ニ  
 シテ携ヘ老臣某ノ家ニ詣リ曰ク臣老矣幸ヒニ  
 兒學成矣然レ凡醫ニシテ千石ヲ食ムハ多キニ  
 過グ兒ニ五百石ヲ賜フテ足矣乃チ家ヲ順庵ニ  
 與ヘテ致仕ス享保間壽ヲ以テ家ニ終ハル善諷

書畫船  
 卷畫船  
 逐龍舟  
 鸚鵡舟  
 鸚鵡舟  
 蓮葉舟  
 五石ノ大  
 瓢ヲ舟ト  
 為シ江湖  
 ニ浮ブ  
 草ヲ縫ヒ  
 船ト為ス  
 昆靈池

着實ヲ務ム  
 以テ人ニ接セズ  
 山ニ採リ水ニ釣リ  
 世ト相遺ル  
 泉石ノ間ニ往來ス  
 蚤夫漁老ト相親  
 大丈夫ヲ以  
 テ自ラ負フ  
 知ルハ俊傑ノ貴  
 ナリ大節ヲ持スル  
 ハ志士ノ任ナリ

子曰ク善哉長順ノ其子ヲ愛スルヤ甚ダ愛セサ  
 ルニ似テ而シテ之ヲ愛ス世人往々舐犢ノ愛ニ  
 溺レ而シテ廢子有焉此則チ真ニ其子ヲ愛セザ  
 ル者ノミ噫

池無名傳  
 安積良齋

池無名字ハ貸成九霞山樵ト号ス京師ノ人天下  
 稱シテ大雅堂ト為ス所ノ者也襟度蕭散形骸ヲ  
 土木ニシ毀譽得表都テ度外ニ付ス慈叔夜阮仲  
 容ノ風アリ書ヲ善クシ画ニユニ五歳ノ時千果  
 禪師ニ見ユ學黨ノ字ヲ作ル頗ル怪偉禪師大ニ  
 之ヲ奇トシテ曰ク是麒麟見ナリ後當ニ海内ニ  
 名アルベシト長シテ意ヲ晋唐ノ古帖ニ刻シ結

中快電艦 撞雷舸ア  
 リ孫權 小艇ヲ名  
 ヲケテ馳 ト曰ヒ又  
 飛鳧ト曰 フ長風  
 ニ駕シテ 萬里ノ波  
 濤ヲ渡ル 一棹葉  
 ヲリモ危

頗ル古人ノ風アリ  
 志モ俗吏ノ態ナ  
 シ古良吏ノ風ヲ  
 存ス百折屈セズ  
 竟ニ大業ヲ天下後  
 世ニ成ス操觚ニ  
 従事ス酒ヲ好マ  
 ズ肉ヲ喜バズ滄  
 泊以テ性ヲ養ヒ道  
 遠以テ體ニ適ス  
 欲ヲ寡フレ以テ德  
 ナ養フ食ヲ節シ  
 以テ體ヲ養フ日  
 體飄逸自カラ一家ヲ成ス畫法ハ則チ梅道人倪  
 雲林ノ間ニ出入レ專ラ氣韻ヲ以テ主トス山水  
 尤モ精絶世人争ヒ之ヲ購フ零絹尺楮ト雖凡寶  
 重セサル莫シ是ヨリ先キ狩野氏土佐氏世画苑  
 ノ冠冕タリ其衣鉢ハ皆宋元諸名家ニ出ツ而シ  
 テ授受寢其真ヲ失ヒ卒ニ變ジテ笨俗トナル有  
 志ノ士其弊ヲ矯メテ之ヲ古ニ復セント欲ス而  
 シテ力以テ之ヲ振スルニ足ラズ獨大雅才最モ  
 高ク志最モ篤シ動モスレバ必ク法ヲ華人ニ取  
 ル而シテ時人未ダ之ヲ信セザルナリ嘗テ画扇  
 ヲ齎シ尾濃諸州ニ遊ビ一握モ售レズ困テ飯リ  
 瀬田ノ橋ニ抵リ悉ク之ヲ水中ニ投ジ益發憤苦

シ天ト 半蓬ヲ爭  
 フ五湖 ノ船一  
 葉ノ舟 楫ヲ中流  
 ニ擊ツ 音樂類  
 總樂 黃帝咸池  
 ノ樂ヲ洞 庭ノ野ニ  
 張リ奏ス

カラ任カルノ重キ  
 此ノ如シ 従容ト  
 レテ自得ス 喜怒  
 色ニ形ハレズ 仁  
 義忠孝ノ人心ニ存  
 スルハ猶火ノ燧ニ  
 於ケルカ如シ 慊  
 慨憂憤危ヲ蹈ミ險  
 ナ冒シ 軀命ヲ捐  
 テ一世ヲ濟フ昔  
 臂ヲ攘ケ腕ヲ抗レ  
 之ヲ燧ヲ鑽テ火  
 ナ得ルニ譬フ 市  
 勵シ遂ニ古人ノ堂奥ニ闖入シ聲價隆々然海内  
 ニ震フ而シテ画ヲ言フ者ハ宋元諸家ヲ以テ準  
 據ト為サザル莫シ性奇山水ヲ喜ミ又濟勝ノ具  
 ニ富ミ千里孤往月ヲ經テ返ルヲ忘ル層巒複嶺  
 飛屐上下其高峻ヲ窮メザレハ止マス最モ富士  
 山ヲ愛レテ屢々之ニ登リ毎ニ其路ヲ異ニシ榛  
 莽ヲ披キ狐兔ノ蹊ヲ攀ヂ人迹ノ未ダ到ラザル  
 處ヲ究メ異人ニ遇フ神姿奇偉烟火中ノ人ニ非  
 ズ蓋シ仙ナリト云フ先後作ル所ノ富山圖凡ソ  
 一百幀横側正偏備ニ其妙ヲ極メ天下ノ絶筆々  
 ソ蓋シ大雅ノ人ト為リ纖毫塵垢以テ其懷ヲ溷  
 ラズ而シテ之ヲ濟スニ江山ノ助ヲ以テス故ニ

ルニ陰陽ノ和ヲ以テレ燭スニ日月ノ光ヲ以テス趙簡子ノ鈞天廣樂雅樂ヲ奏スル者ハ陽阿採菱ニ始マル八風九歌

井ノ間ニ奔走シ名利ノ途ニ汨没ス布衣韋帶ノ微負賤乞丐ノ賤天下後世ニ傳ヘ以テ世教ヲ翼輔シ民徳ヲ涵養ス 黷廉ヲ崇飾シ道途ヲ修束シ以テ斯民ヲ利濟スル者 砥行抗節身ヲ以テ世ニ徇シ民彝ヲ導ク者 念獨ノ餘リ志ヲ一撃ニ逞

奇致全涌雲烟腕ヲ遠リ氣ハ五采ノ外ニ起ユ而シテ韻ハ六法ノ中ニ出ス勉強ヲ以テ到ル可ラザル者アリ富士山ノ若キニ至テハ則チ特妙卓詭石破レ天驚ク實ニ曠古有ラザル所ナリ其行事亦多ク人意ノ表ニ出ル者多シ嘗テ浪華ニ赴キ画筆ヲ遺ル妻追躡シテ之ヲ授ク乃チ投梓以テ謝シ其室タルヲ知ラザルナリ聞ク者絶倒ス 蒙商画ヲ索ム許シテ果サズ屢奴ヲ遣リ之ヲ促カズ竟ニ就ラズ奴門ヲ出テ大ニ罵ル大雅走リ出テ陳謝シ魚ニ毫ヲ濡シテ之ニ付ス每ニ石刻十三經ヲ購ハント欲シ衣食ヲ縮ムル數年錢百貫ヲ得タリ書買ニ就モ購焉書買贏利ヲ牟リ與

三極九變ノ樂黃帝伶倫ニ命シテ樂ヲ作り嶰谷ノ竹ヲ取り管ト為ス 楚子地室ヲ為リテ懸焉容登レバ金奏下ニ作ル

コシ 自ラ身ヲ殺シ仁ヲ為ス 書ヲ讀ミ道ヲ論ジ將ニ其身ヲ終ヘントス 不世ノ大功ヲ建テ天下ノ耳目ヲ一新ス 當時之ヲ師表トシ後世之ヲ稱道シテ哀ヘザル者 仁義中ニ熟シテ略外ニ顯ハレ 經國ノ大道ヲ知ラズ情ヲ矯メ名ヲ邀メ

ヘズ大雅長吁而飯リ祇園祠ノ修造ノ事アルニ會ス乃チ擧テ以テ經費ヲ助ク其奇異絶俗類ネ此ノ如シ妻玉蘭間澹飾ラズ能ク夫ノ行ニ配ス亦画ヲ善クシ良辰美景ゴトニ斗酒相酬ヒ大雅琴ヲ彈ジ玉蘭秦箏ヲ鼓シ相和シテ歌フ觀ル者幾ンド晋宋間ノ想ヲ作ス安永丙申疾ヲ以テ葛原ノ草堂ニ卒ス年五十四

**説明** 説ハモノ、ワケガラチトナコトナリ

説ハ解ナリ述ナリ義理ヲ解釋シ而シテ己ノ意ヲ以テ之ヲ述ブルナリ説ノ名ハ説卦ヨリ起ル經義ニ傳テ更ニ己ノ見ヲ出シ縦横抑揚詳贍ヲ以テ上ト為ス論ト

絲ハ竹

清操儉德後世ノ

大ニ異ナル無キナリ

ニ如カズ

摸範ト為ル久フ

屬文説

頼山陽

竹ハ肉ニ

シテ漏サズ機ニ乘

衰也文ヲ屬スル顧フニ大将ノ兵ヲ用フルガ如

如カズ

ジテ之ヲ天下ニ舉

レト云フ百言ヲ屬スルハ百騎ヲ用フルナリ千

律ヲ吹キ

施ス 嫌疑ノ際ニ

萬言ヲ屬スルハ千萬騎ヲ屬スルナリ法ニ非レ

南風ノ競

居リ處レ難キノ事

バ之ヲ用フ可ラズ之ヲ用フルハ法ニ拘ハル可

ハザルヲ

ヲ行フ 物ノ為メ

ラズ其機我ニ在ルノミ前權後勁左龍右虎陣ヲ

知ル 協

ニ擾サレテ情ノ為

闕ダ伍ヲ束ネ其旌戟ヲ列ヌ是ヲ文ノ正ト為ス

律都尉

ノニ牽カレズ 法

正變ジテ奇遊卒其兩翼ヲ裨ケ而シテ伏軍疑兵

秦青節ヲ

ヲ前代ニ取リ誨ヲ

首尾共ニ起リ從麾レテ從橫麾レテ橫百千萬騎

折テ悲歌

來世ニ賜ス 其盛

跳躍騁頓人其端倪ヲ知ルヲ莫レ而シテ麾テ之

スレバ聲

ラズ 英雄ノ事業

ヲ收ムレバ則チ陣伍依然トキノ警ムル所万馬

林木ニ震

ハ常理ヲ以テ論ス

聲ナレ能ク然ル者何ゾヤ其機我ニ在ルノミ何

ト響行雲

可ラサル者ナリ

必ラズ古法ニ襲ランヤ古法ニ襲ラズレテ古法

ヲ過ム

蹕勵風發天下ノ耳

ニ合スレバ文ニ英雄ナルニ庶乎カ

韓城齊ノ

目ヲ一新ス 天下

為善最樂説 佐藤一齋

雍門ニ之

強弱無キ能ハス國

絲竹管絃果テ樂シキ乎吾其耳ヲ聳ニスルヲ見

キ歌ヲ響

家盛衰ナキ能ハス

ルナリ 絲綺文錦果シテ樂シキ乎吾其目ヲ盲ニ

ギ假食ス

○絶域ヲ視ル 四

スルヲ見ルナリ膏梁旨甘果シテ樂シキ乎吾其

既ニ去テ

境ノ如ク海濤ヲ視

口ヲ爽ニスルヲ見ルナリ酒ハ其勝ヲ爛ラシ而

餘音梁ヲ

ル 坦途ノ如シ

シテ色ハ其性ヲ伐ル 狗馬弋獵ハ其氣ヲ暴ニシ

繞リ三日

諤々乎トシテ隱ク

宮室臺榭ハ其體ヲ惰ラシ 凡ソ人ノ趨ツテ以テ

絶ヘズ

ス所ノリ疑々乎ト

樂シト為ス所ノ者ハ吾意未タ其樂ミ為ルヲ見

漢ノ虞公

シテ避クル所無キ

ザルナリ善ヲ為スノ樂ミタルニ至テハ則チ此

善歌七能

ナリ ○抗直彊禦ヲ



ク梁上ノ 塵ヲシテ 起テ飛バ シム○漢 ノ高帝戚 夫人ヲシ テ出塞望 飯ノ曲ヲ 歌ハシム 侍婢數百 人齊ソ唱 へ聲雲霄 ニ入ル○

二異ナリ子ト為ツテ孝其力ヲ竭シテ而シテ其 心ヲ勞シ臣ト為ツテ忠其身ヲ致シテ而シテ其 精ヲ厲マス凡ソ其善ヲ為ス所以ノ者殆ド其苦 ム可キヲ見テ而シテ未ダ其樂ミ為ル者ヲ見ザ ルナリ然リ而シテ親ニ孝ナレハ則チ親樂ミ君 ニ忠ナレバ則チ君樂ム諸チ家ニ推セバ則チ家 樂ミ諸チ國ニ施セハ則チ國樂ム諸チ天下ニ措 ケハ則チ天下樂ム夫レ天下皆樂ミ我何ゾ獨樂 マザラン盎然トシテ其春煦ノ如キナリ煥然ト シテ其暖嘘ノ若キナリ熙々然トシテ其百鳥和 シテ群芳剪クガ若キナリ嗚呼是皆善ヲ為スノ 推ナリ而シテ其樂ミタル果シテ何如タル哉東

陽春白雪 其曲彌高 シテ其和 彌寡シ○ 花上盈ニ ○輕歌妍 美○輕歌 繞リ易ク 弱舞持シ 難シ○聲 播ントシ テ態ヲ含 ズ氣未々

出ツ○日月ト光ヲ 争フト虽凡可ナリ ○鉄石ハ心腸富貴ノ 念ニ於テ灰滅シ盡 ス○是吾節ヲ效シ 命ヲ致スノ日也○ 富貴モ濁スル能ハ 不貧賤モ移ス能ハ 不戚武モ屈スル能 ハズ○父老ユルヲ 以テ歸養ス○家貧 ニシテ備賃シ為メ 二其母ヲ養フ○躬

平王蒼人ニ語り曰ク善ヲ為ス最モ樂シト其此 二見ルアルニ庶ラン歎

棋ノ説

鹽谷篁山

棋ハ機ナリ兵機ヲ寓スル者ナリ故ニ守アリ攻 アリ正アリ奇アリ虚々實々陰陽開闔變化ヲ法 度ノ中ニ寓シ紀律ヲ縱横ノ間ニ存シ其局ニ對 スルニ方テヤ必ス先ヅ彼此ノ情ヲ察シ強弱ノ 勢ヲ審ニシ笑定テ而シテ後子ヲ下シ正ヲ以テ 合ヒ奇ヲ以テ戰ヒ餌シテ之ヲ食ハシメ利シテ 之ヲ誘キ怒テ之ヲ撓マシ卑シテ之ヲ驕ラシ險 二要シテ之ヲ擊チ伏チ設ケテ之ヲ陥イレ倚角 擒縱離合出没死ヲ生ニ回シ敗ヲ勝ニ轉シ始ニ

理ラズシ  
テ芳ヲ騰  
グ○餘姿  
ヲ彫扇ニ  
掩ヒ輕塵  
ヲ畫梁ニ  
散ズ○今  
ノ歌舞ス  
ル者身ハ  
秋葯ノ風  
ヲ被フル  
ガ若シ○  
長袖ヲ奮

ラ勤苦ヲ執リ心ヲ  
盡シテ供養ス○天  
ヲ呼ビ神ニ禱リ身  
ヲ以テ代ランヲ求  
ム○蹄泣天ヲ呼ビ  
神ニ禱リ方ヲ得タ  
リ○母ノ疾ニ待シ  
衣帶ヲ解カザルモ  
數年○時人以テ  
孝感ノ致ス所ト為  
ス○忠孝一門ニ萃  
マル○父ハ忠臣タリ  
子ハ孝子タリ夫何

處女終ニ脱免風ノ如ク火ノ如ク山岳ノ動カザ  
ル如ク魚麗タリ六花タリ常山蛇勢タリ整々肅  
々犯ス可ラズ紛々紜々乱ル可ラズ死地ニ陥テ  
勝ツ韓信ノ趙ヲ破フルガ如ク其不意ニ出ヅル  
李愬ノ蔡城ヲ襲フガ如ク術ヲ以テ敵ヲ誑ク孫  
臆ノ龐涓ヲ獲ルガ如ク敗ヲ轉ジテ勝ト為ス田  
單ノ七十餘城ヲ復スルガ如ク千態万状出沒變  
幻窮己有ル靡シ蓋シ勝敗常ナシト雖ヒ大抵機  
ヲ得ル者ハ勝チ機ヲ失フ者ハ敗ブル機ハ猶弩  
牙ノ一發回ラザルガ如ク間ニ髮ヲ容レズ故ニ  
能ク機ヲ知ル者ハ惟一著ヲ争フ豊太閤ノ賤岳  
ニ趨クガ如ク平右府ノ桶峽ヲ襲フガ如ク先レ

ト以テ機  
廻リ鐵腰  
ヲ擢キ以  
テ廻起ル  
趙飛燕  
身輕ク能  
ク掌上ノ  
舞ヲ作ス  
流風迴雪  
ノ若シ○  
舒ルハ  
飛霞ノ清  
漢ニ曳ク

ゾ帳ニヤ○扼腕切  
齒悲涕長歎ス○志  
ハ秋霜ヨリ烈ニ心  
ハ崑玉ヨリ貞ナリ  
慷慨節ニ死スル  
ハ易ノ從容義ニ就  
クハ難シ○義ニ勇  
ニシテ利ニ淡シ○  
音吐鐘ノ如ク氣岸  
甚ダ峭シ○慷慨卓  
犖志大ニシテ才奇  
ナリ○志雄ニシテ  
氣驚ス○端亮ニシ

スレバ則チ人ヲ制レ後レバ則チ人ノ制スル處  
トナル一先一後勝敗係馬善ク其機ヲ知テ而ル  
後ニ棋為ス可キ也予棋ヲ解セズ好デ人ノ棋ヲ  
囲ムヲ觀殆ニド寢食ヲ忘ル始メテ爛柯ノ虛ナ  
ラザルヲ知リ戰國ノ時ニ生レテ良將謀士ノ神  
變鬼化機ヲ兩陳ノ間ニ決スルヲ見ザルヲ恨ム  
ナリ棋ノ説ヲ作ル

○老子猶龍説 川北温山

默然トシテ潛シ倏然トシテ躍リ駭々然トシテ  
虚ニ冲シ變化測ラレズ此之ヲ龍ト謂フ神且靈  
ト謂フ可キナリ然レ其肉食フ可ラズ其皮衣  
ル可ラズ則チ羊豕狐狸魚鼈ノ以テ食フ可ク以

カ如ク屈  
スルヲハ  
岳柳ノ華  
池ニ紫フ  
ガ如シ  
扶ハ明月  
ノ銀河ニ  
汎フニ似  
體ハ輕風  
ノ流波ヲ  
動スガ如  
シ玉樹  
後庭花ノ

テ偉度アリ  
ニシテ善ク疾ム  
恬静不欲意ヲ家事  
ニ經ズ  
牧民ニ長ズ  
強記  
獨至ノ處アリ  
ニ進ミ月ニ化シ賢  
頗ル富ム  
物ナシ  
食ヲ忘ルニ至ル  
窮骨髓ニ入ル  
子ナク種僕ナシ

テ衣ル可キニ如カザルナリ凡ソ天下ノ物此形  
象アレバ必ズ此功用アリ苟クモ此功用ナケレ  
バ之ヲ不神不靈ト謂フモ亦可ナリ史稱ス孔子  
周二適キ礼ヲ老子ニ問フ既ニシテ之ヲ目スル  
ニ龍ヲ以テス學者惑焉余ヲ以テ老子ヲ觀ルニ  
其言玄微其教ヲ體セント欲セバ猶影ヲ逐ヒ風  
ヲ搏ツガゴトシ是夫子ノ吾知ル能ハズト謂フ  
所以ナリ曰ク然レバ則テ老子優レル歎曰ク老  
子ハ龍ナリ夫子ハ人ナリ天下百年以テ龍無カ  
ル可シ一日モ以テ人無ル可ラザルナリ夫子ノ  
意ヲ推セバ蓋シ謂フ龍ノ綱ス可ラズ綸ス可ラ  
ズ贈ス可ラザル羊豕狐狸魚鼈ノ用ニ供ス可キ

曲 霓裳  
羽衣ノ曲  
赤鳳來  
ノ曲  
壁  
月瓊樹  
俯仰節ニ  
中ル

躬ヲ薪氷ヲ執リ  
然トシテ自ラ安ン  
章句ヲ梳セズ  
詩文ヲ攻メズ  
二經論ニ志アリ  
諷夜奮勵シテ經史  
ヲ研鑽ス  
生 口角沫ヲ噴キ  
鼻端火ヲ發ス  
光爛々トシテ聲四  
座ヲ動カス  
大聲壯語勇ヲ賣

ニ如カザルナリト  
習 說 尾藤二洲  
兩兒相嬉ンテ問卷ノ中ニ在リ竹ニ跨テ走リ犬  
ヲ驅テ闘フ其為ス處ハ相似ザル莫キナリ稍長  
シテ谷趨舎ヲ異ニシ日々疎ニ月ニ遠ク其為ス  
所ハ相反セザル莫キ也其壯ナルニ及ンデハ乃  
チ一猪一龍何啻韓子ノ言フ所而已ナラニヤ嗚  
呼此何故也豈習之ヲシテ然ラレムルニ非ズヤ  
此故ニ習以テ智ト為ス可ク以テ愚ト為ス可ク  
以テ賢ト為スベク以テ不肖ト為ス可シ習ノ人  
ニ於ケルヤ係ル所其大ナラズヤ吾馬ノ火ニ習  
フ者ヲ視ルニ災ヲ聞ケバ即チ嘶キ談ヲ見レバ

經タルモ  
ノ水性都  
テ盡キ聲  
始メテ清  
越ナリ  
師曠琴ヲ  
鼓○女鶴  
アリ来リ  
集マリ翼  
ヲ舒テ舞  
ス○伯牙  
琴ヲ鼓ス  
志高山流

即チ馳セ常馬ノ慄シテ却走スル者ト殆ンド其  
類ヲ殊ニスルガ如シ故ニ君子ハ習ニ慎ム習テ  
懈ラサレバ何ゾ其成ルナキヲ憂ヘンヤ夫子曰  
ク性相近キナリ習相遠キナリト習ノ人ニ於ケ  
ル其慎ニザル可ケンヤ  
為學說  
尾藤一州  
君子ノ學ヲ為スヤ以テ人ノ義ヲ明ニセント欲  
スルナリ何ゾ人ノ義ト謂フ父子親有ルナリ君  
臣義アルナリ夫婦別アルナリ長幼序アルナリ  
朋友信アルナリ是ヲ天下ノ大經ト謂フ人ノ義  
タル所以ノ者是ノミ苟クモ之ヲ明ニセント欲  
セン乎諸ヲ聖賢ノ訓ニ求メザル可ラズ聖賢ノ

水ニ在リ  
鍾子期皆  
能ク之ヲ  
知ル○一  
曲ノ康陵  
散○趙壁  
ノ五短ニ  
於ケルヤ  
始ハ則チ  
心ニ之ヲ  
驅リ中ハ  
則チ神之  
ニ遇ヒ終

議論侃々トシテ苟  
クモ合スルヲ求メ  
ズ○其喉ヲ轉シロ  
ニ出ル皆時ノ忌ム  
所ト為ル○書ヲ讀  
ムヲ喜ビ義ヲ為ス  
ニ勇ム○人寸長ア  
レバ推奨シテ措カ  
ズ○形軀眇少ニシ  
テ風貌凡陋ナリ○  
軀幹短小ニシテ五  
尺ニ滿タス○坎珂  
迢迢以テ老死ニ至

訓布テ方策ニアリ四子六經浴閩ノ書ニ論ナク  
即チ漢唐諸註ノ註タル元明諸說ノ說タル旁ラ  
馬斑諸史董韓諸家ニ逮ブマテ森然備焉巋然存  
焉而シテ其之ヲ讀ムヤ亦各次第アリ純駁辨ナ  
ク雅鄭并奏ス可ラズ亦須ラク采擇スル處有ル  
ヘキナリ之ヲ讀ムノ方宜シク奈何スベキ朱子  
曰ク讀書ノ法ハ序ニ循テ精ヲ致スヨリ貴キハ  
ナシ而シテ精ヲ致スノ本ハ則チ又敬ニ居テ志  
ヲ持スルニ在リ蓋シ序ニ循テ精ヲ致サレバ  
則チ涉ル所廣シト雖凡歷ル處博シト雖凡亦汗  
漫而已紛錯而已何ゾ得テ之ヲ明ニスルヲ得ン  
ヤ夫レ記問々學ハ以テ人ノ師タルニ足ラズ載

ハ則チ天  
之ニ隨フ  
○萬古清  
絶○松風  
自ラ合フ  
○衆山皆  
響ク○泉  
器ノ中琴  
徳最モ優  
○戴安道  
琴ヲ破リ  
テ王門ノ  
伶人タル

ル○所謂隣人ノ病  
ヲ以テ己ガ頭痛ト  
為ス○音吐宏壯ニ  
シテ舌尖銳利ナリ  
○結心滓精殆ント  
寢食ヲ忘ルニ至ル  
○高歌朗吟志少シ  
モ屈セカ○心ヲ焦  
シ思ヲ苦シメ寢安  
ンセカ食飽カカ○  
盤錯ニ遇テ挫ケカ  
紛擾ニ處シテ乱レ  
カ○衣食ヲ損シ嗜  
欲ヲ忍ビテ一意貯  
蓄ス○戚然トシテ  
中傷ミ忸怩トシテ  
汗浹シ○名聲隆々  
トシテ起ル○事ヲ  
處スル判明決絶  
テ婦人咕嚕ノ態ヲ  
シ○性役爽清蕨ニ  
シテ施予吝ナラズ  
○容色婉麗慧ニシ  
テ勇ナリ○容兒ハ  
婦人ニシテ風骨ハ  
仙ナリ○從容閑雅

能ハザル  
ヲ證ス○  
鏗爾タリ  
風前ノ曲  
琅然タリ  
徽外ノ音  
○高深ノ  
妙趣○太  
古ノ遺音  
○伯牙琴  
ヲ鼓スレ  
バ六馬仰  
キ絲ス○

記以テ其得ルナキヲ譏ルナリ故ニ君子ノ學ヲ  
為スヤ卑キ自リシテ高ク邁キ自リシテ遠ク此  
ニ盈テ彼ニ進ミ優ニシテ之ニ遊ビ涵ニシテ之  
ニ泳リ怡然以テ自カラ得ル有リ而シテ後ニ愉  
快タリ然レ其精ヲ致サンヲ欲シテ敬ニ居リ  
志ヲ持スル丁ヲ知ラザレバ則チ所謂卷ヲ釋テ  
茫然タル者亦何ゾ得テ之ヲ明ニスル所アラシ  
哉夫子曰ク操レバ則チ存シ舍レバ則チ亡ス出  
入時ナク其郷ヲ知ル莫キハ惟心ノ謂歟大學ニ  
曰ク心焉ニ在ラザレバ視テ見エズ聽テ聞エズ  
食ラテ其味ヲ知ラズ故ニ操テ之ヲ存シ心ヲシ  
テ常ニ在ラシメ然ル後乃チ始メテ以テ夫ノ精  
ヲ致スベキナリ學者誠ニ能ク其ニ從事スレバ  
則チ人ノ義者其レ亦以テ之ヲ明ニスルニ庶乎  
矣

○御馬説  
安井息軒

善ク騎ル者アリ驚ハ則チ逸シ悍ハ則チ馴ル終  
ハ倏忽百里前ニ峻路ヲク而シテ馬喘汗セズ人  
軒輕セス鞍上平穩席ニ坐スルヨリモ安シ或挫  
テ之ヲ問フ答ヘテ曰ク我モ亦知ラサルナリ然  
レ凡我吾志ヲ正フシ其性ニ恃ラズ故ニ驚ハ我  
之ヲ激シ悍ハ我之ヲ懷ク駿ト驥トニ至テハ其  
為ス所ニ任ジテ我與カラス鞍我之ニ據ルノミ  
未ダ嘗テ其脊ヲ攻メズ轡ハ我之ヲ按スルノミ

執已瑟ヲ  
 鼓セバ遊  
 魚出テ聽  
 ク○趙友  
 瑟ヲ鼓セ  
 ハ風舞フ  
 清廟ノ  
 瑟ハ朱絃  
 ニシテ疏  
 越一唱シ  
 テ三嘆  
 鏗雨トシ

聲ヲ馳セ譽ヲ要ル  
 ニ譽ニ出ス○性悍  
 ニシテ動スレハ則  
 テ反目相抗ス○四  
 方ニ放浪シ終ル所  
 ナ知ラズ○勢ノ争  
 ヒ難キヲ知リ病ヲ  
 引テ職ヲ辞ス○悲  
 憤志ヲ立テ氣由テ  
 以テ振フ○精神一  
 到何事カ成ラサラ  
 ンヤ 千金ヲ花費  
 ニ抛テトモ券ヲ斗

未ダ嘗テ其口ヲ擾サズ務メテ馬性ニ適フテ其  
 カヲ盡サズ而シテ馬ノ我ト警鞍ノ間ニ相忘ル  
 此ノ如キノミト或聞テ嘆ジテ曰ク子ノ言ハ道  
 也技ニ進ム矣苟クモ子ノ道ヲ譽ゲテ而シテ之  
 ヲ民ニ施コセバ天下窮民無キ矣  
 ○勉強時間ノ説 鈴木唯一  
 時ハ貨幣ナリトハアングロサクシヨニ入種々  
 ル英人ノ常ニ言フ所ニシテ光陰ノ惜ム可キコ  
 トヲ謂ヘルナリ時ハ人ノ一生ヲ組織スル物ノ  
 如シトハ亦同人種タル米人ノ常ニ言フ所ニシ  
 テ人ノ一生ハ秒時ヲ積ミテ成ル者ナレバ一秒  
 時ト雖凡之ヲ忽ニス可ラザルコトヲ謂ヘルナ

テ瑟ヲ舎  
 テ起ツ○  
 譬ヘバ柱  
 ニ膠シテ  
 瑟ヲ調フ  
 カゴトシ  
 ○瑟ヲ操  
 リ齊門ニ  
 立ツト三  
 年○凄清  
 萬籟ニ和  
 シ斷續三  
 湖ノ繞ル

鐘ニ折ク能ハス○  
 機智ニ巧ニシテ伎  
 術ニ粗ナリ○情ヲ  
 忍ビ義ヲ缺キ羊昧  
 シテ己マズ○守錢  
 奴ノ桎梏以テ解ク  
 可ク鉄公雞ノ膏膏  
 以テ醫ス可シ○危  
 フシテ持セズ顛ツ  
 テ杖ケズ○耻ゾ可  
 キヲ耻ヂズ是ヲ鄙  
 夫小人ト謂フ○世  
 人ノ名利ニ於ケル

リ斯ノ如クニアングロサクシヨニ人種ハ殊ニ  
 光陰ヲ惜ムノ性アリテ只之ヲ口ニ言フノミニ  
 アラズ又之ヲ實際ニ徴スルニ鐵道ヲ創作シ瀛  
 船ヲ創造シテ大ニ其時ヲ省キタルヲ以テモ亦  
 見ル可キナリ我輩モンゴリヤン書生モ亦光陰  
 ヲ惜ミ時ヲ省クノ工夫ヲ為サズンバアル可ラ  
 ス何如ニシテカ能ク光陰ヲ浪費セズシテ時ヲ  
 省クコトヲ得可キ豈其他ノ術アランヤ一日ノ  
 内最モ勉強ニ適ス可キ時間ヲ擇ビ電勉トシテ  
 事ニ従フニ若カザルナリ其時ハ泰西ノ大家ノ  
 生理心理兩學ニ徵證シテ定メタル所ニ擬レバ  
 清晨喫飯シテヨリ三時間ト午餐ヲ終ヘテヨリ

琵琶

馬上ニ之ヲ奏シ以テ慰ス○銅琵琶ハ阮咸ノ造クル所故ニ今琵琶ヲ呼ビ阮咸ト曰フ○謝靈運琵琶ヲ彈ジ大道曲ヲ

耽々逐々席ノ肉ヲ視蛇ノ蛙ヲ逐方如シ○名利ニ於ケル附贅懸疣ノ如クス○其為ス所終ニ濟物ニ存ス○箕裘ヲ紹ギ意ヲ史學ニ刺ス○擊斫剛ニ過ギス平恕柔ニ流レズ○神爽ニ體健ナリ○鑑空衡平物遜情ナシ○光明正大ニレテ柔剛中ヲ得ル

ル○月ヲ抱キ風ヲ懷フ○唐開元中賀懷智琵琶ヲ善クシ石ヲ以テ槽ト為シ鷓鴣ヲ以テ絃ト為シ鉄撥ヲ用ヒテ之ヲ彈ス○

○精神活潑ノ妙機ヲ失ス○花法美觀ヲ務ム○人ニ勝ントスル者ハ須ク先ソ徳ヲ己ニ修ムベシ○徳勝テ敵自ララ屈ス是ヲ真勝ト為ス○一驕心ニ入レバ百藝皆癡ト○一念此ニ及ブ毎ニ慚悔汗下ル○人誰カ忠孝ヲ口ニセザラン巧シテ能ク之

一時間ナリトス世間勸學ノ諸君ハ宜シク早起ノ習慣ヲ養成シテ克ク此時間ニ勉強スベシ果レテ克ク勉強セバ陸行ノ汽車ニ乘シ海旅ノ汽船ニ駕セルガ如ク速ニ夫ノ「ア」クロサクシヨ人種タル英米人ノ地位ニ達セン「足」ヲ企テテ期ス可キナリ

讀支那字說

小永井小舟

木村君漢字ノ多キヲ憂ヘ冗ヲ削リテ要ヲ存セント欲ス其說極メテ當レリ然ルニ今ノ古ヲ距ル遠シ文質殊ヲ別ニシ繁簡事ヲ異ニス人情風俗亦從フテ相同ジカラズ獨文字ヲ古簡ニ復セント欲スル勢難カラズヤ試ニ思ヘ今ノ日本古

ノ日本ニ非ズ文明日ニ益文明開化日ニ益開化朝ニ瀛車ヲ唱ヘタニ瀛燈ヲ説ク頭髮ヲ断チ帽子ヲ戴キ章服ヲ易ヘ腰刀ヲ脱ス婦齒涅セズシテ瓠犀ヲ露ハシ婦額眉ヲ画テ遠山ヲ呈ス行クニ幅織ヲ張ルモノ領ニ時鏢ヲ掛クル者鳶合羽ヲ服シ人ノ堂ニ上ル者煉化廊ヲ礎テ奇貨ヲ耀ス者宛乎タル歐巴人ニシテ猶其粒食スルヲ疑ヒ隱然タル墨利人ニシテ猶其綠眼ナラサルヲ恨ム其他龐雜文離異狀變態名數ス可ラズ是特ニ容貌ニ見テ此ノ如シ益其事端浩繁世務紛錯復タ岳拱無為ノ古ニ非ザルヲ知ルベシ而シテ又何ゾ獨彼ノ字ノ繁多ヲ憂ヘンヤ且彼ノ文

却月ヲ天  
漢ニ横ヘ  
廻風ヲ浴  
浦ニ寫ス  
○紫塞ノ  
昭君ヲ悲  
マシノ鳥  
孫ノ公子  
ヲ泣カレ  
ム○織絃  
振舞○哀  
絃斷ノト  
欲ス○絃

ヲ躬ニスル者天下  
其幾アルヤ○人誰  
カ死セザラン只其  
死處ヲ得ザルヲ是  
恐ル○靛々ノ徒或  
ハ吹索シテ毀ヲ騰  
クル者寡カラズ○  
要スルニ是小徳ノ  
出入ヲ議スルノミ  
○常ニ利用厚生ヲ  
以テ己ガ任ト為ス  
○其著スル所ヲ觀  
レバ其履歷ノ在ル

字ヲ正サント欲スル先我文字ヲ正スニ若カズ  
今我用フル所ノ文字ハ和ニシテ和ナラズ漢ニ  
シテ漢ナラザルアリ洋ニシテ洋ナラザルアリ  
這箇一種ノ文字乃チ我ノ古ニ非ザルニ似タリ  
而シテ盛世ヲ頌シ文化ヲ贊ク是ニ非ザレハ宜  
シカラズト謂ヘハ則チ言語文字亦氣運ニ隨フ  
テ自カラ變アルヲ知ル務メテ之ヲ排除セント  
欲スルモ如何ゾ排除シ得ンヤ況ヤ其排除セン  
ト欲スル所獨區々文字ノ間ニ非ザルヲヤ

◎猫狗說 頼山陽

猫ハ鼠ヲ内ニ捕ヘ狗ハ盜ヲ外ニ警シメ各其職  
アリ以テ主ニ事フル者ナリ然ルニ諺ニ曰ク猫

清ク撥利  
シテ語録  
々○耳ヲ  
駭シ心ヲ  
娛マシム  
○指底ノ  
高風舌頭  
ノ胡語○  
中虚ニシ  
テ外實○  
懷去リ抱  
キ來ル○  
江州司馬

所性情ノ洩ル、處  
亦以テ知ル可キナ  
リ○之ヲ讀メバ亦  
其志ノ在ル所ヲ知  
ルニ足レリ○遺書  
數種皆刺心瀝血ノ  
注グ處ナリ○一旦  
溘焉其志ニ酬ユル  
ヲ獲ズ○二豎子ノ  
崇ル所ト為ル忽焉  
没ス○宛然トシテ  
目ニ在リ○恍トシ  
テ其音容ヲ認ム○

犬畜フ丁三歳ナルモ三日ニシテ惠ヲ忘レ狗ヲ  
畜フ丁三日ナレバ三歳失ハズ而シテ人常ニ貓  
ヲ愛シテ狗ヲ疎ンズルハ何ツヤ其形体ヲ以テ  
スレバ則チ狗ノ粗ナル貓ノ臆アルニ若カザル  
ナリ其聲音ヲ以テスレバ則チ狗ノ厲ナル貓ノ  
嬌ナルニ若カザルナリ其性情ヲ以テスルバ則  
チ狗ノ剛決ナル貓ノ善柔便佞ナルニ若カザル  
ナリ是ヲ以テ猫ノ主人ニ於ケル其左右ヲ離レ  
ズ其閨闈ニ出入シ食フニ魚アリ寢スルニ褥ア  
リ而シテ狗ハ則チ土ニ寢ネテ餒ヲ食ヒ終歲主  
人ノ面ヲ望見スルヲ得ズ盜ヲ認メテ吠ルモ賞  
ナシ鼠ヲ縱シテ捕ハザルモ罰ナシ悲ム可キカ



評傳 文例 卷之中

ノ淚ヲ牽ハ今也則チ亡笑悲ヒ  
 ク○潯陽ノ裁○其事ヲ叙シテ  
 ノ一曲○之ヲ傳フ○以テ後  
 好ク和スノ史ヲ作ル者ノ料  
 ル者ハ唱ニ充ツ○聊カ其事  
 讀シ善クヲ記シテ後ノ識者  
 聽ク者ハヲ羨ツ○予之ヲ其  
 咨嗟ス○卿人ニ聞キ之ヲ偉  
 青衫ノ司ナリトス○逸事極  
 馬頻ニ淚メテ多シ他日搜問  
 ヲ揮フ○補ハントス○上人  
 第ハ秦聲ニ聞ク所ヲ叙シ以

鷹ノ禽ヲ搏スルヤ既ニ鴻鵠ノ類ヲ獲輒チ左ニ  
 草根ヲ握リ而シテ右ニ鳥ヲ攫ム鵠逸スル能ハ  
 ガルナリ蓋シ鷹自カラ其身ノ重キ鴻鵠ニ勝ツ  
 能ハザルヲ度ワテナリ故ニ操リ以テ自ラ固フ  
 スルアレバ則チ彼飛揚ノ志アリト雖モ以テ之  
 チ維制スベシ北條義時ハ源實朝ノ鴻鵠ナリ高  
 師直ハ足利高氏ノ鴻鵠ナリ而シテ實朝高氏操  
 リ以テ之ニ勝ツアルヲ知ラズ其身ヲ促ヒテ掣  
 去セルノニ至ル是其智鷹ニ如カザルナリ

○籠鷲說示塾生  
 柴栗山

ナリ○其  
 文ニシテ其行事ヲ審ニスル  
 素質○物ヲ得タリ因テ其顛  
 順フテ律末ヲ叙ス○想フニ  
 呂ニ合ヒ此外猶傳フ可キ者  
 音叶フテ多カラシ○吾其語  
 宮高二同ヲ聞キ今其人ヲ見  
 ジ○朱絃ル○亦人端ナリ○  
 微ニシテ其不文ヲ辞セズ姑  
 慷慨哀氣ク之ガ傳ヲ作ク以  
 切ニシテテ不朽ニ存ス○亦  
 懷傷○六以テ史料ノ一助ト  
 律ニ應ジモ為スベキカ○身

小鳥ヲ籠養スルモノ鷲雖チ捕ヘ得テ其聲ノ澁  
 濁ヲ憂ヘハ老鷲ノ善ク鳴クモノニ就テ其聲ヲ  
 學バシム俗之ヲ附子ト云フ雛初メテ籠ニ在ル  
 ヤ遷躍上下蹉然トシテ少頃ノ静ナシ忽チ老鷲  
 ノ一啼ヲ聞キ便チ翼ヲ展メテ凝立諦聽スルモ  
 ノ、如シ時ヲ越エ始メテ能ク身ヲ動シ既ニシ  
 テ低美之ヲ學ブモノ、如シ此ノ如ク一兩日乃  
 チ能ク故喉縱轉音響啾啾愛不可レト云フ嗚呼  
 微ナル彼ノ小禽尚其聲ヲ好クスルヲ思ヒ而シ  
 テ賢チ希フヲ知ル人ヲ以テ鳥ニ如カザル可シ  
 ヤ癸卯二月十三日之ヲ神川生ニ聞キ書以テ塾  
 生ニ示ス

已專 文例 卷之中 五十六 説門

八風ヲ總ス 死シテ名存ス 噫偉  
 ナル哉 今日ノ事  
 惟死アルノミ 今日  
 日ハ我死所ナリ  
 死ニ臨ミ從容トシ  
 テ曰ク吾事畢矣  
 遂ニ血ヲ嘔テ死ス  
 言訖リテ終ル  
 遂ニ慨然命ヲ授ク  
 ○此ヲ去ル一步死  
 所ニ非ス 生テ聖  
 朝ノ民ト為リ死シ  
 テ聖朝ノ鬼ト為ル

○力人説示三上仲敬 全  
 力人ノ力ヲ養フヤ飯ノ生熟度ヲ失ヘバ食ハバ  
 魚ノ骨多キハ食ハズ娼妓ノ美ヲ養フヤ日ニ豆  
 腐ノ滓ヲ喰ヒ以テ悦テ其肌膚ヲ澤シ食ヲ減ジ  
 飢ヲ忍テ以テ其腰肢ヲ纖細ニス夫レ力ノ用々  
 ル一搏ノ勝ヲ為スニ止ルノミ美人用タル一夫  
 ノ悦ヲ為スニ止ルノミ而シテ力人娼妓ノ智ヲ  
 以テ猶能ク自ラ惜ミ自ラ愛スル乃チ爾リ大丈  
 夫將ニ往ヲ繼ギ來ヲ闕キ出レバ則チ此民ヲ仁  
 壽ニ濟シ處レハ則チ斯文ヲ將來ニ傳ヘントシ  
 今乃チ一醉一飽ノ快ニ艶シ以テ性命ヲ危クス  
 ルモ何ゾヤ孟子曰ク飲食ノ人ハ則チ人之ヲ

中春鶯轉 生ラ萬戸ノ辰ト  
 ナラザレバ死シテ  
 ノ月輪蟾 關羅ノ王ト為ラン  
 影破レ十 今日一死ノ外其  
 三ノ絃柱 他ヲ恤フルニ違ア  
 鴈行斜ナ ラズ大働身ヲ舉  
 リ ゲ地ニ投ジテ自刎  
 ス 死且畏レズ臂  
 斷ツ何有ラン 敢  
 テ其死ヲ逃ミテ其  
 心ヲニセンヤ  
 人ノ食ヲ食スル者  
 ハ人ノ事ニ死ス

賤シムト蓋シ娼妓力人ニ是如カザルヲ以テ也  
 ○洗竹説 土井馨牙  
 新竹ハ則チ妍ナリ老竹ハ則チ勁ナリ世ノ勁ヲ  
 憎テ妍ヲ愛スルヤ其竹ヲ洗スル者必ズ老ヲ去  
 テ新ヲ留ム愛スル所妍ニ在リ竹ニ在ラズ是豈  
 竹ヲ知ル者ナランヤ天下妍者甚多シ苟クモ其  
 妍ヲ取ル何ゾ必ズモ竹ヲ之愛セン竹ヲ愛ス  
 ル處ノモノ正ニ其勁ヲ取ランノミ國ノ人ヲ用  
 フルヤ唯其剛ヲ取ラン既ニ其剛ヲ取り又其制  
 シ難キニ苦ミ毎ニ淘汰ヲ加フ而シテ剛者愈  
 減ズ是亦今ノ竹ヲ洗スルモノナリ  
 初學 捷徑 記傳論説作例大全卷中終

言傳 效 卷之中

鳳凰ノ鳴 君ノ禄ヲ食ヒ君ノ難ヲ避クルハ忠臣ニ非ザルナリ 一死國ニ報ズルアル  
ヲ作ス 彌泣晝夜心ニ存ヲ圖ラズ 刀ヲ抜キ三々ヒ躍リ而シテ之ヲ擊ツ  
謝元卿神 目ヲ瞑ラシ大呼跳染シテ起ツ 將ニ刀ヲ引キ自決セントス 端坐休レズ  
仙ニ遇ヒ 顔色生ケルガ如シ 我誓テ辱ヲ受ケズ一死決セリ 一君ヲ去テ一君ニ事  
叢霄ノ笙 フ吾為ザル所ナリ 之ニ臨ムニ兵ヲ以テスレヒ辞色撓マス 之ヲ勸ムル  
ヲ吹ク 三日終ニ屈セズ 我頭斷ツ可シ膝屈ス可ラズ 宛曲相慰スレヒ終ニ得可  
離鴻別鶴 ラズ 死ニ至ルマテ罵テ口ニ絶タズ 之ヲ樹洞ニ懸ケ謝テ之ヲ殺ス 刑  
二臨ニ怡然トシテ詩ヲ賦シ顔色變セズ 目ヲ張リ生ルガ如ク刀手ニ在リ  
其聲清壯 牢フシテ抜ク可ラズ 其忠烈ヲ壯トシ禮ヲ以テ之ヲ葬ムル 聞ク者皆淚  
金石裂ク 流ス 之ヲ聞テ嗚咽セザルナシ 士論之ヲ壯トス 時人哀憐セザルナ  
可シ 容 賊衆之ガ為メニ魄ヲ落ス 天下翕然其誠節ヲ稱ス 往吊スル者殫  
中此聲ヲ 市ヲ為ス 議者之ヲ避トス 一坐之ガ為ニ淚ヲ飲ム 名聲藉々今ニ至ツ  
聞ケバ人 テ夜ヘズ 湮没用エズ志士ノ恨ヲ為ス 亦以テ真ス可シ 地下ニ首肯ス

マシテ腸 可シ 死スト雖凡猶生クルガ如シ 豈悲ム可キニ非ズヤ 亦惜ム可キカ  
ヲ斷タシ ナ 死シテ餘榮アリ 子然タル一憤士身ヲ殺シテ何ヲ為スヤ 意氣激昂  
ム 石ヲ 身ヲ忘レ國ニ報スルモノト謂フ可シ 邑人其居ヲ踰シテ孝順里ト為ス  
裂キ雲ヲ 其一戸ノ祖調ヲ免シ以テ善行ヲ旌ハス 人之ガ祠ヲ立テ祀ル 其門ヲ旌  
穿ツ 曉 ハレテ孝烈ト謂フ 人ノ過グル毎ニ必ズ拝ス 題シテ烈婦某氏ノ墓ト云  
嚙悽惻 フ 其弟婦モ亦節烈ヲ以テ聞ユ 二烈婦前後一轍ノ如シト云フ 於戲豈  
折揚柳 賢ナラズヤ 賢者ト謂ハザル可シヤ 節操長ク天下後世ニ傳フベキナリ  
落梅花 以テ龜鑑ト為ス可シ 百世ノ師表タリ 後人ノ標雉タリ 之ヲ視テ耻  
奇聲獨絶 ル所ヲ知ラザル可ラザルナリ 聞ク者ヲレテ興起スル處アラシム 皆之  
切々風 マ尸祝シ多ク得可ラザルノ人ト為ス 忠臣ヲ求ムルハ必ラズ孝子ノ門ニ  
ニ隨ヒ風 於テスト信ナルカナ 古人ノ言我ヲ欺カザルナリ 今ニ至リ猶口碑ニ存  
々月ヲ帶 ス 史上燦々猶光輝ヲ見ル 真ニ是鉄石ノ人ナル哉 日月ト光ヲ爭フト  
ブ 梅花 雖凡可也 秋霜烈日古人ノ風ヲ見ル 生氣凜々人ヲレテ毛髮森然上リ豎

言傳文例卷之中

ヲ吹落ス  
○江邊三  
弄○枕上  
一聲○黃  
鶴樓中玉  
笛ヲ吹キ  
江城五月  
タシム○一時人口ニ膾炙スルノミナラズ天下後世皆之ヲ稱道ス○惜ムラ  
クハ年少未ダ事ヲ更ス謂ラク慷慨扼腕以テ事ヲ濟ス可シト為シ遂ニ吏議  
ニ掛ル○此傳ヲ得テ長ク朽ナズ○儻逸アリバ更ニ補入セン○時ニ其大節  
ニ係ルモノヲ掲ゲテ後世人士ノ龜鑑ト為ス○其餘ノ末技復論スル所ニア  
ラザルナリ○一時精神ノ注ク所亦以テ貴重ス可シ○大義名分ノ寓スル所  
之ヲ湮滅スルニ忍ヒズ○後ノ臣子タルモノ亦以テ法ト為ス可シ

中欄終

雲禽之ガ為ニ異ヲ婉シ泉蟬之ガ為ニ鱗ヲ躍ス○遠ハ以テ靈ニ通シ微ニ達  
ス可ク○近ハ以テ情ヲ寫シ神ヲ暢フ可シ○長笛ヲ撫シ以テ憤ヲ摠ブ○玉笛歌ニ倚  
ル○馬融長笛ノ賦○王褒洞簫ノ賦○羌笛龍鳴  
上欄終

